

〔例の十五〕海國の男子は是非とも游泳術を知ツて貰ひたいと同時に人工呼吸法をも必ず忘れてはならぬ。

例の十六 文はやりたし我が身は書けず物をいへかし白紙がく。

鳩巢先生の文は初めは二人稱的對話体ものかなは三人稱的咏嘆体で二者互に軋こた標して居り従つて人に話し掛けて居るのか一人で嘆じて居るのか不明である。之れを調和して意義を分明にするには「ものを」に改めて純なる對話體にするか或は御身は誰人ぞ心なきことを聞こゆるものかなと改めて前は對話體後には咏嘆體と分けるがよからう。第十五の文例では「貰ひたい」の一句が二人稱的希求体で他は三人稱的忠告体になつて居るこれは「貰ひたい」を「居る」と改めれば先づよいい。第十六の文例では「物をいへかし」が二人稱的希求体「白紙が」が三人稱的平叙体になつて背中合はせになつて居る。「物をいへかし白紙」或は「物をいへばよい」白紙がとすれば調和して文意も判然して來るであらう。但し茲にはむねと文意の精確といふ點から説くので口調文勢等の問題は自ら別である。

5114

陷的文章とも稱すべきものでどちらか一方讓歩して一方を立て、やらねば到底纏まとまつた文となることが出來ぬ。

語句の關係は外國文を譯する際に於いて殊に注意すべきものである。近年李白の名高い把酒問月之歌の

青天有月來幾時吾今把盃一問之。

といふ冒頭の句を

青天月あり來たること幾時ぞ吾今盃を把つて一たび之れを問ふ。

(高山林次郎氏譯)

と譯したのが現はれた。これは本來青天月ありつてこのかた幾時ぞと讀むべきで天にお月様があつてから何年になつたぞといふ意味であるが此の譯文に於いては語の關係が亂されたから全で意味を成さぬものになつたのである。創作はいふに及ばず翻譯の容易ならぬことこれにても知られる。

文意を精確ならしむる爲めに守るべき第三の必要事項は

語句と思想とを適合せしむること

514
である。語句と思想との適合とは語句が表はすべき思想事柄にキチンと符する
ように詳しくいへば語句が思想より多からず少なからぬように略し過ぎもせず
餘計なこともいはいはぬようにせよといふことである。これは嚴密にいへば前項語
句の關係の中に含まるべきものであるが便宜の爲め獨立させて別に項を設けた
のである。

語句が思想事柄の要する所よりも多過ぎれば文意が多岐散漫になり、少な過ぎ
れば混沌糺穢となる。語句過多の弊ある文は餘計な枝葉を刈り除いて本筋を明
らかに見せねばならぬ。語句過少の弊ある文は文路の缺け壞れた所を填め補つ
て趣意が通れるようにせねばならぬ。過多なる方の例

〔例の一〕貴君は品行悪しき故幾ら夜分勉強しても試験に落第致しませう。

(某高等學校和文英譯試験問題)

此の文の本筋は「貴君は試験に及第が出来ない」といふことで、それに「品行が悪いな
ら幾ら勉強しても」といふ二句が添うて居る。幾ら勉強してもだめなら特に「夜分
と斷るには及ぶまいなまなか夜分と斷る故夜分ならぬ時に勉強すれば及第が出

515
来るかとも推される。夜分といふ語の無い方が多少は精確にならう。一体此の
文は語句の過多なると共に過少なので、肝要な方面をうち捨て、餘計なことをい
つて居るからかく曖昧になつたのである。「貴君は品行が悪くないから」といふ勉
強して學科の方でよい成績を得ても及第は覺束ないでせうとでも改めれば精明
且つ穩となるであらうと思ふ。

〔例の二〕行くに従つて風景が益絶佳となる。(耶馬溪紀行)

従つて「益」の二語は段々と進み上る漸層的の語、而して「絶佳」は此の上なく雅なる
こと雅の最上點の謂ひである。かく互に矛盾した語が雜居して居る故に風景が
段々佳くなるのか、此の上なく雅いのか紛らはしい。これは畢竟絶といふ餘計な
語が加はつて居るからである。

語句の過少なる方即ち文句を略し過ぎて精確を缺いた文の例を擧ぐれば

〔例の三〕ものあはれは秋こそまされと人ごとにいふめれど、それもさるも
のにて、今ひとときは心もうきたつものは春の景色にこそあれ。

(吉田兼好徒然草)

〔例の四〕 久方の光のとけき春の日に（しづ心なく花の散るらむ。（船友則）
 初めの文の意は、人々は秋が一番おはれなものだといふ。成る程それもおはれだが、心も立ち立つように面白いのは春景色だといふ意味である。若し此の意味ならば、さるものにての次ぎに、あれど或はあるがといふ語が添はねばならぬ。さるものなるが、或はさるものなれどと改めてもよし。「さるものにて」だけでは語の不足、文の不備で、どうしてもさうは取れぬ。かくいはば古人庇護の國學者先生が、それは當然の省略で、其處が兼好のうまい所だ、それがわからぬ初學者は、根から話せぬなと、最負の引き倒しをいふであらうが、それは「お腹がすいて飯が欲しくない」といふ文がお腹がすいては居るが、飯は欲しくないといふ意味に取れるといふと同様の無理である。尙ほ慾をいふと、今ひとときはも餘り面白くも精確でもない。前に秋は心の深きなつもの、とあらば、今一きは、深き立つは春だといつても、利くが前は、おはれ後は、うき立つでは、今一きは、の比較語が一向利かなくなつて来る。おはれを面白いといふ意味に取つても、矢張り同じことである。次ぎは、友則の歌は、此の長閑な春は、何故花がせはしく散るだらうといふこと、これは春の日としづ心との

辨に、或は何故に、といふ語を入れて見ぬと、意義を成さぬ。せれば、字數の限られざる歌だから許してやらうといへば、いふやうなものの無理な省略で、或意の精確を缺いて居ることは争はれぬ。

〔例の五〕 鐵木具一種の法例を設け、甲若し其の食を他に分かつとを肯せざれば乙の目前に於いてこれを食することを禁じ、又許可を得ずして獨食する時は其の食を奪ふことを問はざりき。奪ふとも其の罪を問はざりきとでも補はねば不備の文である。

〔例の五〕 伊勢三郎義盛後藤兵衛尉實基等與一を判官の前に引さすまて、兎の十郎指し申す上は仔細あるべき。疾く急ぎたまへ。海上暗くなれば、脱ゆしき御方の大事なり。はやといひければ、與一誠にと思ひ胃をば脱ぎて、童に持たせ探鳥帽子引き立て、薄紅梅の鉢巻しめ、手綱かいくつ、扇の方へ、うち向かひける。〔源平盛衰記〕

「仔細あるべき」ところ語は是らぬ。此處は那須與一が扇を射ると命ぜられた時

辭退したのを押し止めて、汝が兄なる十郎が汝を推舉した上は何の仔細かあるべきぞといつた所である。若し此の意味とすれば何の仔細かあるべきと補はねば不備、不精確の文となる。然らざれば兄が推舉したからには推舉した仔細があらう即ち汝の腕に覚えがあらうといふ意味にも取れて紛らはしい。

〔例の六〕おはかた己れ一身は恩にはこるとも萬人のうらみを残すべきことをばなどか願みざちむ。君は萬姓の主にてましませば限りある地をもあて限りなき人に分かたせ給はむことは推して量り奉るべし。若し一國つづを望まば六十六人にてふさがりなむ。〔神皇正統記〕

「分かたせ給はむことは語不足の非難を免れぬ。分かたせ給ふことの難かるべきは」とように改めねばなるまい。

文意を精確にする爲めに注意すべき第四の事項は、重きを置く點を明らかにすることである。表はすべき限りの思想事柄をば残りなく表はし得ても重きを置く點の異なるに従つて文意も大いに變はつて來る。例は善い人物だけれども才が無

51111

「といふは誹つたのである。才は無いが善い人物だといふは稱めたのである。昔或る百姓が梅雨のえらく降るのを見て

五月雨や年中の雨降りつくし。

といふ句を讀んだ。ところが京都の御公卿様が此の句を傳へ聞いて一唱三嘆、どうも巧い面白い。いかにも梅雨三十日降りに降る雨の中には春雨秋雨時雨驟雨一年中に降る種々の雨の姿を悉く含んで居る。よい所を捉らへた。僅々十七文字の裡に五月雨の精髓を咏みつくして居る。どうか一生の思出には此の様な風流人に逢つて親しく言葉をかはして見たいと見ぬ戀にあてられたが、後人あつて百姓俳句師の住國姓名を知らせてした。御公卿様は雀躍して早速路銀を送つて撥き寄せ、玉吟を拜唱して感歎に堪へ申さぬ。年中の雨の姿を五月雨に見るとはようマア思ひ附かれたと稱めると、百姓俳句師無然として頭を掻き、めつをうな仰せ私風情に何のその様な風流心が御座りませう。只だ毎日々々据風呂をこぼした様に大雨が降る故、これでは一年中の雨を一月の間に降り盡くしてしまふであらうと思つてのいたづらで御座ります」と答へたので御公卿様も餘りの意外に厭

氣に取られて開いた口が塞がらなかつたといふ話がある。

此のくひちがひはつまり重きを置く所が違つた所から出来たのである。一方は雨の姿に一方は雨の量に目のつけ所はちがふけれどもどちらが悪むいへぬ要するに此の十七文字に斯様な齟齬を起す不精確の素があるといふに歸する。更に一二の例を擧げて今度の講を下へよう。

〔例の一〕神の存在は何人も證明し得ざりしことなれども疑ふべからざる事實なるべし。

神の存在は疑ふべからざる事實なるべけれと古來何人も之れを證明し得ざりし。

共に同じ事柄を叙したものであるが趣意の歸著する所は大分違ふ。前の方は宗教の必要を説くに適し後の方は人智の薄弱を説くに適して居る。

〔例の二〕朝鮮に於いて男女の交際は殆んど全く杜絶せられたり。其の基督教會堂に於いては男子席と婦人席との間に幕を垂れ、二者互に相見ることを得ざらしむ。二者を併せ見得るは只だ中間の境上に立てる牧師のみ。

其の基督教會堂に於いては幕を以て男子席と婦人席とを隔つ。故に只だ境上に立てる牧師の二者を併せ見得るのみにて、二者は互に相見ることを得ざるなり。

前の文に於いては牧師の特權といふような點が重くなり、後の文に於いては朝鮮に於ける男女交際の不自由といふ點が重くなつて居ることがわかるであらう。

文意精確の論はこれでさつと済んだ。例を擧ぐることに多きに過ぎて煩はしい様であるが、例證によらぬ文章論は空論に流れて何の役にも立たぬ故か、はしたものである。基礎論は多少煩瑣でコツ／＼して居るが、此の一關を過ぎれば後は光風霽月の別乾坤となる。暫しの御辛抱を乞ふ。

本講義に擧げた文例は昔の書物、今の人の文章及び學生諸子の文章の三つから取つたのである。古人のは皆其の作家と出所とを書いてある、學生諸子のは末尾に(學)と記してある。今人のは皆印刷に附せられて著述の形をなしたもので、取つたが、出所は示さぬ文末に何とも記してないのは皆それである。但しこれは凡べて文章學の立場から見ても論ずるのみで、決して作者其の人を褒貶するのではない、其の心して讀まれむことを乞ふ。

練習文例

左の文に意義の不精確なる所があるか、若しあらば之れを正せ。

- (一) 爰に鎮西八郎爲朝は我れは親にも連れまじ、兄にも具すまじ、功名不覺も紛れぬように只一人如何にも強からむ方へ差し向けたまへ。たとひ千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は射拂はむざるなりとぞ申しける。〔保元物語〕
- (二) しかる間、皇子人なき處にひそかに大織冠を招きとり給ひて仰せ給はく、入鹿常に我が爲めに無禮を致す、あやしと思ふほどに天皇の御爲めにやともすれば遠勅す。〔今昔物語〕

左の二つの文の意味は同じきか異なるか、若し異ならば如何様か異なるか。

- (一) 蘭相如曰はく、我れ驚下なりといへども、何ぞ一の廉將軍を恐れむや。
- (二) 蘭相如曰はく、我れ驚下なりとも、何ぞ一の廉將軍を恐れむや。

文章

講師 五十嵐 力

文義の明晰

學者と共に考へ俗衆と共に語れ、讀ましむる權利なく讀む義務なき文章、達意の文とは何ぞ、明晰とは何ぞ、文義を明晰にする方法第一、讀者の知識程度に對する適應、用語の通俗、言表の簡易及び周到、第二、一般人心の作用に對する一致、言表の秩序聯絡及び統一

英國の碩學フランシス・ベーコンの名高い言に「學者と共に考へ俗衆と共に語れ」というてある。其の意味は、事物の理を考ふるに當たつては學者のよう精しく深く研究して精緻を極め高尚を極めるが可い、さりながら之れを言ひ表はすに當たつては無學なる俗衆にも合點の行、平たく通俗に話せよといふことである。ベーコンは文章に於いても辯舌に於いても共に當時の第一流で、彼れの文を讀み説話を聴く者は常に其の説話文章の終はらぬとをのみ心配したといはるゝほどの人であるが、さすが大文豪はどあつていかにも公正著實なる見識である。

世の文を學ぶ者、高く自ら標置して、知己を千載に待つ「俗物我が文を讀ましむるに足らず」と瘦我慢をいふ者の常に肝銘すべき言であらう。

此の頃或る新聞記者が我が國現今の博士とか學士とかいはるゝ人達の文章を批評して、彼等の文章は概ね悪劣粗笨、無趣味にして讀むに堪へぬ、たとひ其中に如何ほど立派なことが書いてあるにせよ、吾等には自分の腦の健康を保護する必要がある、頭を痛めてまで不文の著述を讀むべき義務は無いといふことを痛論した。多少言ひ過ぎた點もあらうが、確かに時弊を穿つて居る。これも今日文を學ぶ者の深く考ふべきことであらう。

無論斯くいへばとて無趣味難解の文章悉く讀むに足らぬといふのではない、否其の文章の如何にかゝはらず忍耐して精讀せねばならぬものもある。しかしながら、それは偉人の大思想などに關していふべきことで、有つて益なく、無くして損なき平凡なる文章に就きていふべきことではなく、又古人の遺文に關していふべきことでは、是れより文章道に進まうとする者の荷にも口にすべきことではない。それ故、先づ通常の場合に就いていへば、頭を痛めず、に理解し得ぬ文章は讀まじむ

る權利なく、讀むべき義務なきものというて、差支なかるべく、從つて初學者が當面の努力は、わが文を他に頭痛の心配なしに讀ませる工夫、即ち思想を明らかに寫し出だす工夫でなければならぬ。

さて文義の明晰といふは文章の意味がはつきりして解り易い、言ひかへれば讀者の心に入り易いことである。前なる精確に於いては文義の紛らはしからぬことが主眼で、其の方からいへば讀者に如何ほど頭を痛めさせても文法上誤解されぬように出來て居ればよいのであるが、明晰の方の要求はそれよりは一步を進め、成るべく讀者の腦を疲らさずして容易く吞み込ませるといふ點にある。誤解されず、而かも解り易く出來れば、まづどうやら一人前の文章になつたといふべく、此の段階に至つた文章を稱して達意の文といふのである。

文章の意味が明晰にわかるには先づ精確でなければならぬ、精確ならぬ文章が明晰に解りようのないことはいふまでもない、それ故文義を精確ならしめむが爲めに守るべき個條は悉く明晰の方にも必要であるが、特に文義を明晰にするに必要なる事は第一讀者の知識程度に對する適應といふ方面から見て三ヶ條、第二、一

般人心の作用に對する一致といふ點から見て三ヶ條ある。

第一、讀者の知識程度に對する適應

- (一) 通俗なる語を用ゐること
- (二) 言表を簡易にすること
- (三) 言表を周到にすること
- (一) 言表に秩序あらしむること
- (二) 言表に聯絡あらしむること
- (三) 言表に統一あらしむること

第一、讀者の知識程度に對する適應

とは我が文章を讀む者の知識の程度を測つて其の程度相應に解り易く書くことである。例へば子供に讀ませるものならば子供にわかるように「カーサー人形を買つて下さい」「太郎さん鬼ゴッコをして遊びませう」とよりにあるべく、少年に對してならば少年相應に少年時代は人間一生中の春なり「兵士になると租税を納むるとは國民の二つの大いなる務めなり」とよりにあるべく、而して高等教育を

受けた者或は専門學者に對する時に於いて始めて哲學は原理の學なり學とは組織されたる知識の謂ひなりと六かしくいひ、或は現象實體理性範疇進化陶汰眞如法相などと云ふ専門上の語を使うてもよいのである。此處の差別を知らずして子供に讀ませる文章或は一般世間を相手とする著述の中で現象實體の講釋など初まるともうお仕舞ひで讀者は直ぐに耳を塞いで彼方に向いてしまふ。故に文章を書く者は必ず常に讀者の知識程度に目を著けて其の腑に落ちるよりに彼方々向かせぬように注意せねばならぬ、而して其の方法は先づ成るべく通俗なる語を使ひ、言ひ表はし方をやさしく、又行か届くよりにするに在る。同じ事をいふにも用語の難易言ひ表はし方の工合で六かしくもなれば解り易くなるは何人も知つて居ることであらう。例へば天の命之れを性といふ、性に率ふ之れを道といふ、(中庸)とあつては容易にわからぬが天道様の人間にお授けなされた所のものが取りも直さず人間の性質ぢや其の天道様から授かつた性質に従つて行ふことが即ち人間の守るべき道ぢやといへば大抵の人には了解される。無論其の文が精確でさへおれば解らぬは讀む者の伎倆學力の上下によることで解り易いも

の通俗なるもの、必ずしも名文とはいはれぬ。「鳩翁遺話」の文章は解し易くとも到底「論語」「孟子」の品高きに及ばず、「論語」「孟子」は解し難くとも矢張り天下の大文章である故に難易の點がらのみ見て論孟を捨て、鳩翁を學べといふとは出来ぬが、茲には唯だ専門學術上の著述其の他特殊の文章の外は成るべく通俗に解り易くし、一般讀者をして容易に理解させるようにせねばならぬといふのである。

(一)用語の通俗とは世間一般に通じてわかるような語を用ゐるを意味する。講者は會で或る小學讀本にて村田銃のことを書いた所に些の説明をも加へずして「拋物線」といふ物理學上の科語を使つたのを見たことがある。又或る中學校の卒業式に於いての事、某顯官が演説の中に世の中には中學に居た中は成績の優等であつた者も卒業後慢心して墮落した例が澤山ある。是れ實に諸子の猛省すべき好例であるといふので卒業生を戒めたが、戒められた肝腎の御當人が茫然として少しも理解した容子が見えなかつた。是等は凡べて通俗語を用ゐずして迂遠難解の語を用ゐた爲めに招いた失敗である。特殊の修養ある人に向かつての外は「管見」といふよりは「管の穴より大空を覗く」といふ方解り易く、「無鳥嶋の蝙蝠」といふよ

りは鳥なき里のかは波りといふ方耳近くいみじうこちたさわざになむといふよりは甚だしき僻事なり「餘り仰山だ」といふ方勝に落ち易く、湯のけの「聲夕庭に響き烟の一すち中空になびきて此の横濱を出で行かざれば見るく大船のかけ波間に消えて再び吾が兄とあひ見む日いつの時とか待ちわたらむ。(久米幹文「西洋にゆく人を送る」)

といふよりは汽笛一聲……とある方遙かに心に入り易い。推古天皇天武天皇といへばわけもなく解ることを御苦勞にも小治田宮に夫の下知ろしめし、天皇「飛鳥淨御原宮に御宇し天皇と古文が、或はブリードリヒ大王といへば手に取るよ

うは解せるものゝを
カンヌー、の哲學者大王のことは十八世紀の思想界に於いて一の特殊なる位地を占む。
とみぬくるたぐひは決して來意を明晰にする所以でない。曲亭馬琴の「八犬傳」大塚信乃が芳流閣の奮闘を描いた所に
暫時の闘戰其のわひなく信乃一人に斬り立てられて血は涿鹿の野を浸し屍

は朝歌に累々たる。

古戰場、いづれも三千餘里を隔てたる漢土傳來の御土産なれど、識者は之れを見て例の街學かと眉を顰め、普通人は齒も立たぬ厄介者と鵜呑みにするか、乃至は往來の娑婆塞げと避けて通る位の事とどのつまり讀者の鼻先きにぶら下がって文意の疏通を妨ぐるに過ぎぬ。乃ち知る殊更に奇古難解の語を用ゐるは要らぬ心配してわざ／＼文章を悪くする所以文章家が出来る限り平易通俗なる語を用ゐる必要あることは是れで十分わかるであらうと思はれる。

(二) 言表の簡易。とは手短かに易しく言ひ表はすを以て此の點から見て避くべきは廻りくどいこと、長たらしきこと、無駄のあること、入り込んで居ること、拗れて居ること、待ち遠しいこと、區劃の明らかならぬこと、等で守るべきは簡單にすること、素直なること、句讀を短くすること、端から片づけ行くこと、境目を判然たらしむること、等である。例へばそれ然り豈にそれ然らむやとひねくるよりは何ぞ然らむはわれどと真直にいふ方わかりよく彼れをして事理に暗き人ならざらしめばと

迂回するよりは彼れ若し事理に明らかならばと正面より言ひ表はす方吞み込み易く人のよりて行くべき道と倒すにいふよりは人の行くべき道と手短かにいふ方解し易く世の尋常の人の企て及ばざる所なりとくといふよりは尋常人の「常人の」と簡單なる方が早わかりである。つまるところ真直に無駄なく句切りよく端から極めて行けばよいので、尙ほ二三の例を擧ぐれば、

凡そ工人は何業に係らず、數個の事に當たりて緩かに兩三度之れを爲すより、一事に當たりて之れを屢すれば、大いに熟練すべし。(某中學國文讀本「分業」)

入り組んで混雜して長たらしきを容易に合點が行かぬ。もつと簡單にし、區劃を明らかにして

工人の業務に従ふや、少しづつ多くの事を爲すよりも、一事を屢々する方遙かに熟練し易かるべし。

とする方明晰であらうかと思ふ。

然れば日本國中に翩翩する胡蝶の種類は、多々なるが如き觀あるが、上に日本の花は其の種類眞に多く、白色、黄色、顔黄色、紅色、赤色、青色、紫色の者濃

淡相鏡以て亂開し紛披映映日本の宇宙は皆花。乃も此の間は舞舞も翩翩し
或は香を竊み或は宿を借る者いかなる類形の原則上其の色を此の花好類せし
め其の羽の光澤を此の花に似せざるなからむや。日本國の禽鳥胡蝶の婉麗
燦爛たるもとよりこれによる。

「似せざるなからむや」では「似せぬ」といふことになる。此の文の真意は花に似せぬ
といふことはないといふので似せざるむや或は似することなからむやでなけれ
ば意味が反對になつて来る。是れ畢竟真直に書かうとはせず、一の言ひ廻しを
巧くして俗目を驚かさうといふ不必得から文義の不明晰を來たしたものである。
源平兩氏の兵權を解かむとし給はば之れを解くべき道豈に無からざらむや。

(新井白石讀史餘論)

これも無からむや或は「あらずらむや」とあるべきで反語の用ひそこねである。
偽善輕薄射利あらゆる罪惡の府として一面嫌惡せられ恐怖せられたる此の
眼に映する都會なるもの、觀念は猶ほ此の意味に於いて東都に於ける非難
の聲なりき。吾人は屢々田園行を歌ひつゝ、東都の俗塵より避けたる多くの

511121

詩人を見た。詩人(聖)の人生の歩みは、
これもどうがな言ひ廻はしをと苦心した結果の是のかけそこねである。真直に
世には偽善輕薄等あらゆる惡徳の府として都會を恐れ嫌ふ人がある。余も亦之
れと同じ意味で東京を好まなかつたといへば苦むなく明晰になるのである。

ただ見る落々たる殘穢朝に藻鹽をもとめ夕に漁網を執りたる一寒漁夫の子
はて堂々其の名天下を震動す。これまた絶代偉人たるガリバルデーその人に
非ずや。羅馬帝國覆滅以來伊國は地理學的名稱にして唯だ地中海に突出し
たる長靴國土たりしのみ愛國の士をして悲歌慷慨の裏に空しく一千載を經
過せしめたり。彼れ微賤なりとも國政亂れて麻の如き伊國晩年の危機に際
し、彼れは慨然として愛國の涙を拭ひ奮然として驟起し、或は熱血を灑いで國
民長夜の夢を攪破し、或は勇往敢行赤手を揮つて四方に轉戦し、百挫千折險を
蹈み難を冒しつひに第十九世紀の下半期に於いて斷柱殘礎の上は儼然たる
新王國を建てた。近衛篤磨氏(ラファエットとガリバルデー)の遺言に
これを用語言ひ廻はしの上の苦心が無効有害になつた例の一つ。ただ見るは現

在眼前の景を見居ることを寫すに用ゐるべき文字で、殘材から起ひがて大名を成したといふ敘事に附加すべき文字ではなく、誓へば一ボ俳諧師が夏の真中に真綿を見て初雪や」と洒落れをなしたようなもので、時宜に適はぬ。微賤より以下も語だけは壯烈だが冗長で弛みがあつて餘計な遊び文句がある爲めなかく明瞭を缺いて居る。これはどの事を書くなら彼れ微賤の身を以て伊國の滅亡に瀕したる時に生まれ奮然厥起して國民を警醒し、四方に轉戦し艱難を凌ぎ盡くして遂に十九世紀……」の方簡潔明瞭で別に不足も無からうと思ふ。

北島親房の「神皇正統記」に三種の神器の徳を人間の徳にたとへて玉は柔和善順を徳とす、智慧の本源なり。

というてある。玉には如何なるわけで特に柔和善順の徳があるか、又柔和善順なる玉が何故に智慧の本源であるが吾等には少しも解せぬ。是等は例の高天原流の素戔嗚尊で失當の比較を強ひて道理に合はせようとした爲めに不明瞭になつたのである。

明の大將李如松二十萬の大軍を率ゐて平壤を復し、勢に乗じて攻め來たりし

を小早川隆景、歸館にむかへ襲ちて大いに之れを破り、如松縲かに身を免れければ、明大いに恐れ使を遣はして和を請ひしが、使者行長に賂ひて朝鮮の四道を日本に納れ、大閼を王に封ぜむといひ入れしかば、行長軍奉行と議りて之れを本營に報せしに、秀吉悦びて和を許せり。(某中學國文讀本「豐太閼の征韓」)

切るべき時に切らずしてだら／＼のる／＼と續いた有様骨の無い蛇のようだといはうか、中風患者の道行と申さうか。かような無骨軟體の千鳥足文章の意味が取り難くして讀者を倦ませ疲らすのは、短く切つて獨立さすれば明らかにわかるべき文をたりしを「せし」が「ければ」「しかば」せしに等の接續句を以て無闇に結び付ける故に不要の關係が澤山、其の間に生じて之れを看取することが六かしくなるからで譬へば重利法の利息算が込み入つて來ると同じことである。斯様な文章を明瞭にするには句讀を短く切つて其の間に無用の關係をつけず、片端から了解して行けるようにするがよい。惣じて文章を明瞭確實にするには語句の儉約が大切で餘計なことは一切いはぬようにせねばならぬ。演説談話に於いて「エー」「オー」「その」の「何です」ねら「ア」「ン」などの餘計な附加物が話を聞かせる

すると同じく、文章に於いても餘計な語句の挿入は大いに讀者の了解を困難にする。歇辭の慎むべき所以である。

一向に神を勞し思ひを費やして日夜之れを暢ぶるに違わらぬ質一は肉瘦せ骨立ち色疲れて宛然死水などのように沈鬱し了んぬ。其の攢めたる眉と空しく凝らせる目とは體力の漸く衰ふるに反して精神の愈々興奮すると共に思ひの益々繁く益々亂るゝを従ひて莖り従ひて解かむとすれば尙ほも繁り尙ほも亂るゝを竟に如何にせばやと心も碎けつゝ、打ち惱めるゝを示せり。

(紅葉山人「金色夜叉」)

前なる眉と目とはの一句は最後の「打ち惱める」を示せりにかゝつて居るが、其の間に「は」を承けそうな文句が澤山出て來ながら承けぬゆゑ、いろくとははに對する關係をうち案じつゝ最後の「打ち惱める」に至つてやうやく二者の關係が見出ださるゝといふ、随分讀者に氣を揉ませる構造である。かような文を稱して「吊懸的文章(suspending sentence)」といふ。最尾に肝腎な文字を吊るしかいて道中で摸索の餘計な心配を讀者にさせるから、物蔭に目的物を吊るしかいて「お來で〜」

い三三

をやる文章といふのである。斯様な文章は解りにくいのみならずやゝもすれば曖昧不精確になる恐れがある故特別の必要な限りは成るべく初めから語句の關係を明らかにして端から了解して行けるようにするがよい。「よゝりて行くべき道」持ちて「食ふべき箸」なども一種の吊懸文である。

要するに文章を簡易にするにはひねくれた言ひ廻しを避けて眞直に言ひ表はし文句をわつさりして入り組まぬようにし句讀を短くして片端から了解して行けるようにし文句を儉約し引き締めて途中で道草を食ひ油を賣る文字が無いようにせねばならぬ。

(三) 言表の周到とは言ひ表はす必要のあるを残りなく綿密に言ひ表はすこと、即ち行き届いて手落ちの無いようにすることである。かくいへば前なる言表の簡易と矛盾するようであるが簡易は言ふを要せぬ贅言をいはぬこと、周到は言はで叶はぬこと及び言へば一層解り易くなることをば落とさずいふことで二者少しも反對する性質のものではない。例へば愚かにて道理のわからぬ者を愚物とし「深切にして且つ丁寧なり」を深切丁寧なりとするが簡易にするにて、「君僕愛

す。君は僕を愛す、或は君を僕は愛すと補ふが周到にするのである。
ガリレオはより以前の人といへども懸かりたる物の同じ速さは揺擺するを見
たる者多くあるべし。然れども此の事實の用あることを查出せるものはガ
リレオを始めとす。(中村敏字、西国立志編)
長さは重さ大さ等の異同に對する關係を示さずして懸かりたる者の同じ速さだけ
にては物理学の専門家にも解り難いであらうと思ふ。畢竟言ひ表はし方が足
らぬからである。

余常に曰はく、貧者草刈らむとする時鎌なし之れを隣に借りて草を刈る常の事
なり。是れ貧窮を免るゝ能はざる原因なり。鎌なくんば先づ日雇取りを爲す
べし。此の賃錢を以て鎌を買ひ求め、然る後に草を刈るべし。此の道は即ち開
國元始の大道に基づくものなるが故に(一)卑怯卑劣の心なし。故に此の心
ある者は富貴を得、此の心なき者は富貴を得ること能はず。(二)富貴を得
括弧の中に「此の道を得れば」といふような文句が入らねばわかりにくい。
結晶形は最も想像し難きものなれば初學者は時々製造場に赴きて磨礬明礬

其の他の結晶が成長して、煉爛たる奇醜に接すべし。
美觀を呈するに接すべし」といふように補はねば甚だ解し難い。

第二、一般人心の作用に對する一致

とは文章が人の心の働き工合に一致してよく解るようによく書くべしといふこと
である。前のは一般世人に解り易くする爲めの又子加減、茲にいふ所は人といふ
人全体の心の働き工合に一致してよく理解し易いようにする方法である。故に茲
にいふ所は通俗簡易周到というふような控え目的、か情的のことではなくして、文
章組立のことに關して常に必ず注意すべき事柄である。

さて第一に必要な言ひ表はす事柄に秩序のあること即ち立派に順序が立
つて近きより遠きに、小より大に、低きより高きに、いふように正しく言を進めゆ
く事である。例へば「食物は咀嚼され嚥下され消化される」といへば秩序が立って
解り易いが、「食物を嚥下し消化し咀嚼く」といへば順序が歪って解り難くなる。
此の呼吸を會得して歩、歩に順を追うて進み行くことが先づ第二に肝要である。

第二に必要な言ひ表はす事柄に聯絡のあること、即ち句々節々密に繋がり合
うて全体がよく纏まるように言ひ換へれば唐突な無關係なる事柄を雜へぬよう
にすることである。例へば「今日學校に行つて公德養成に關する講話を聞いた。
我が國も早く公德がたまねく行はるゝようになればよい」といへばよく聯絡して
解り易いが「今日學校にて公德養成に關する講話を聞いた。日露の關係は今どう
なつて居るだらう」といはば言表する事柄の間に聯絡なき故に讀む者其の意味の
ある所を知るに苦しむであらう。第三に必要なことは言ひ表はす事柄に統一
のあること、即ち文章全体が纏まつて居るようになつて書くべきことである。例へば「我
が家は商家なり、我が市は商業地なり、我が國現今の形勢大いに商業の振起を要す、
而して我が資質は商人たるに適せり、故に我れは商業家となるべし」といへばよく
纏まつて解り易いが、其の中に「我れは風流を好む」「我が國は古來農を以て國の基
とす」などいふことがあらば其の文が忽ち瓦解して纏まらぬようになり、從つて
意味のわからぬものになつてしまふのである。此の秩序、聯絡、統一の三つは意義
の明晰を期する文章家の如何なる場合に於いても深く注意すべきものである。

文章

講師 五十嵐 力

純粹と穩當と

文章家の考究すべきこと 言表を穩健ならしめむが爲めに必要な
もの二 純粹と穩當と 純粹の要求する所は其の國其の時代に通く
通する上品なる語を用ゐること 消極的にいへば外國語外國の語格、
廢語、新語、地方語、科語、訛語、俚語を濫用せざること 其の例 穩當の要
求する所は古來の用語例に從つて語句を選擇、按排すること 其の例
告別の辭

文章を修むる者の考究すべきことは澤山ある。第一が基礎に關する事、第二が
修飾に關する事、それから組織の事、文體の事、理想の事など數へ盡くせぬほどの研
究問題が前途に横たはつて居るのに基礎論さへろくく講じたふるに及ばずして
會員諸子と別かれを惜しまねばならぬ場合に立ち至つたのは遺憾至極に思ふ所
ある。

屢々言うた通り文章家の第一に注意せねばならぬことは思想の明寫、言表の穩

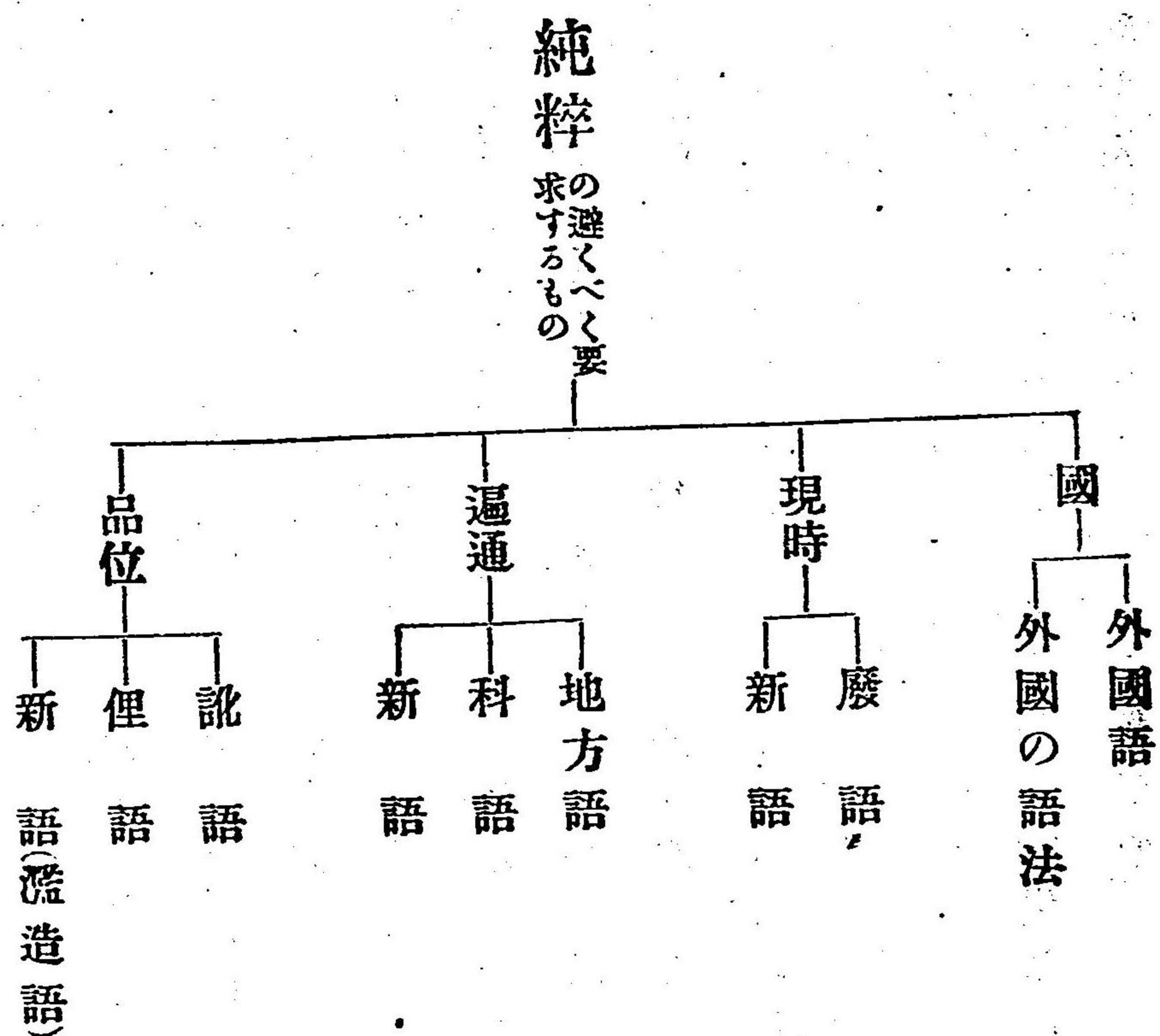
健の二つであつて、思想の明寫の中には精確と明晰との二つが含まれ、言表の穩健の中には純粹と穩當又は妥當との二つが含まれる。其の中精確明晰の二者については已に詳しく説明したが、さて意味が明らかに精しく解るといふだけで、言ひ換へれば文義の誤解さるゝ氣遣ひなく又解り易いといふだけで文章の能事が終はるかといふにさうではない。無論文章の最初最大の目的は思想の傳達にあるから傳へようと思ふ思想が明らか解りさへすればそれで十分なもののようではあるが、已に己れの思ふ所を他に傳へるといふ以上は單にわかる間違はれぬといふだけでなく、一步進んで心持よく讀んで貰ひたいとは誰れしも思ふ所であらう。文辭の美に恍惚たらしめ、アツと稱揚感嘆させるとまでには行かずともせめては氣持よく讀ませたい、少なくとも氣持わるくなく讀ませたいと希ふは人情の自然である。解ることは明瞭に精確にわかっても厭味のある文章だ、氣に障る文章だ、下司ばつた文章だ、下品な文章だと見下げられ斥けられ唾棄されては文章の目的がまだ達せられぬといはねばならぬ。此處が言表の穩健といふことの大切なる所以で、此の要求に應ずるものが即ち純粹と穩當との二つである。

純粹の要むる所はまじり氣の無い立派な上品な選抜の國語吾等の今の場合には日本語を用ゐることである。風俗の上で譬ふれば、床違ひ棚のある立派な日本の座敷に椅子テーブルを置く用の辦ぜぬことはないが之れを見れば何となく不調和の感が起る、又子で豆腐汁を食ひ、肉又で芋、胡蘿蔔の煮物を食ふ、何となくしに變な氣持がする。これは何の爲めであるかといふにまだ日本化せぬ外國の風俗が交つて居るからである。今日チヨン鬘を結び、或は陣笠を被る別に差支へることはないが誰れが見ても滑稽と思ふ。これは廢れた風俗だからである。東京の真中で奥州の立附を穿き、關西風の短い羽織を著る、何となく可笑しい。これは一地方にのみ行はるゝ風俗だからである。徳利を花瓶に換へ、粗を花瓶の臺にする、實用の上に事は缺かぬが之れを見て眉を擧めぬ者は無からう。これは物を用ゐるべき所に用ゐずして上品な物を使ふべき場所に下品なものをかく爲めである。

文章も亦之れに異ならぬ。「酒を飲んだ」といふ所に「ワインを飲んだ」といふ「常識を缺けり」と云つて然るべき時に「コムモンセンスを缺けり」といひ「君は何處へ行

くか」と問はれて「僕は今學校にまで行くべし急ぎついでいふ。意味は極めて明らかに解しても何となく耳障りがして此のハイカラ小僧がと鼻先であしらはるることになる。これは我が國の言葉を用ゐずして濫りに外國語を用ゐるからである。「露國のポタル」「善かバツテン」「温か茶」「あきわいせ」「面白ガンベイ」といへば解らねばそれきりよく解つたにしても好い氣持がせぬ。これは熊本、長崎、鹿兒島、名古屋、奥州等の方言即ち全國に通ぜぬ言葉を用ゐるからである。「何でい、べらんめい、愚圖々々して居やがるねい」といふ、よくわかるが可笑しい。言葉が野卑だからである。純粹の要むる所はつまり斯様な雜駁な言葉を用ゐることを避けて純なる日本語を用ゐることである。

純粹の要求する所は積極的にいへば其の國、其の時代、に遍く通ずる、上品なる語及び語法を用ゐること消極的にいへば特別の必要なき限り、外國語、外國の語法、廢語、新語、地方語、科語、詭語、俚語等を用ゐぬことである。之れを國時代、遍通及び品位の四點から分類して表に作れば左の通り。



尙ほ詳かにいへば文章を純粹ならしむるには第一に其の國の語(日本語)を用ゐね

ばならぬ。此の點から見て避くべきは妄りに外國語及び外國の語法を用ゐることである。第二には現時用ゐらるゝ若しくは解せらるゝ語でなければならぬ。此の點から避くべきものは已に廢れた古語及び勝手に新らしく造つた語である。第三には國全体に遍く通ずる語でなければならぬ。此の點から見て避くべきは國の一部分にのみ行はるゝ言葉即ち方言専門學術上のみ用ゐらるゝ言葉即ち科語及び俄か細工の新造語である。第四には品位の高い語でなければならぬ。此の點から見て避くべきものは語の本來の意味を誤つた言葉即ち訛語卑俗なる言葉即ち俚語及び新語である。左に例を示しつゝ説明しよう。茲に

外國語　といふのは日本文的に組み立てた文章の中に必要も無きに外國語を挿むことである。英國の文章學者は夷語挿入格 (Barbarism) と稱して大いに之れを忌んで居る。例へば

彼れの言には、フ、イ、アあり。

テ、イ、ストの發達せざることを我が國現時の教育家の如きは無し。
我が當局者は、アイ、ロ、ニーを解せず。

の如きは謂はゆる夷語挿入格である。フ、イ、ア (F, I, A) は火、テ、イ、スト (T, E, S, T) は嗜好趣味或は鑑賞眼、アイ、ロ、ニー (I, R, O, N, Y) は反語と云つて別に事缺きもせぬに故らに氣取つて西洋ぶつた所即ち人の感觸を害すべき所であらう。但し外國語でも久しく行はれて國語同様に普通になつたものは此の限りでない。例へば洋燈、脚筒燐寸等は其の類である。殊に支那、朝鮮、印度の言葉の中には普く行はれて世の人其の外國語たることを知らざるものも澤山ある。朝鮮語のテ、ラ (寺) 印度のまだら (斑) ホ、ト、ケ (佛) などは其の一例である。又外國語を日本語的に働かせることもある。料理するといふべきを料理る、吟味するを吟味る、愚痴をこぼすを愚痴る、彩色するを彩色く、と働かし、Violate を犯る、envy を嫉る、と働かすなどは其の一例である。元來外國語を取り入るゝは國語を豊富にする所以で必ずしも忌むべきことではないのみならず用ひ様によつては却つて文章に生命あらしめ變化あらしめることも出来る。併しながらこれは寧ろ例外であつて通常の場合に於いては必要なき限り濫りに之れを用ゐぬよう、又廣く行はれず從つて耳障りになるべきものを用ゐぬように注意せねばならぬ。

外國の語法といふのは邦語を外國文風に組み立つることを云ふ。例へば

今人の面の皮は象の皮だけそれだけ厚くなれり。

吾人は今後外交上の消息に注意を拂はざるべからず。

鶏卵は余によりて食はる。

余は疾走して友を後ろに残せり。

等のたぐひでこれらは英文風といふべきものである。特にハイカラ風に言表する必要な限り象の皮ほど注意せざるべからず。余は卵を食ふ友を追ひ抜かりで差支あるまいと思ふ。

廢語とは曾ては遍く通じたる言葉であつたのが廢れて用ゐられなくなつたのをいふ。例へば昔は大和文漢文というたが今は國文漢文といはではよく通ぜぬ。「任すをまく」といひ「申すを申さく」といひ「仰せを蒙る」仰せをかいぶるといふたぐひは擬古文或は神官の祝詞諷詞に於いての外はまづ廢れた語といはねばならぬ。「なか／＼」といふ言葉は今日は頗る餘程などいふ意味に用ゐられるが曾ては却つて或は然り「諸曲餘の木」といふ意味に用ゐられたこともある。「梨壺の五つの

人「後拾遺和歌集序」は今ならばいつたり又は五人とあるべき所

左大臣時平のおとは基經のれとどの御太郎なり。「大鏡」

は今日ならば長男第一子などあるべき所であらう。徳川時代の國學者眞淵宣長春海千陰濱臣等の文はいふに及ばず今日の國學者にもましかば「べらなり」的の廢語を用ゐて得々たる人が見える。明治の文壇に立って活きた文章を作らうと思ふ者の三省すべきことであらう。

新語 茲に新語といふのは濫造語即ち造り損ねの新語といふ意味であつて、已に成り立つて居る立派な言葉を用ゐずして自分細工の不熟なる語を用ゐ、又はよく落ち著かぬ新仕立の語を以て新事物に命名することをいふのである。例へば「温容」といふべきを「温貌」といひ「汽船」汽車といふ現時普通の語があるのに「ひしげ船」「ひしげ車」といひ「突貫」又は「吶喊」といふよい言葉があるのに「突喊」といふ無理に結び合はした語を用ゐ、瓦全といはずして「瓦健」といひ歴史的事實を史實、道德的感情を「德情」といふ類、いづれも濫造新語の例である。かく濫造新語を用ゐることは大いに忌むべきことであるが新語を用ゐることの必要なることも勿論少なくない。

例へば未曾有の新事物が現はれ出でて之れを表はす新たな語を要する場合、在来の語がまづくして落ち著かぬ時に之れを改める場合等は其の主なるものであらう。蒸氣力で走る車が出来れば汽車といふ新語を要し、空気を取り去る機械が出来れば排氣機といふ新語を要する。火輪船を改めて汽船といひ、町奉行を改めて裁判所といふ皆それである。又初めは無理なように見えた新語も時を経る中に熟して味はひある語となることがある。入木道書法のこと、高襟現金、蠻勇内閣等の如き、それであらうか。要するに新語は漫りに使つてはならぬ。之れを使つて可いのは已に存する語が新事物、新思想を表はすに適せざる場合及び新語が在來の語に優れる場合のみである。

地方語(又は方言) とは一地方にのみ行はれて全國に通ぜぬ語をいふ。例へば奥州の、べい、長崎の、バッテン(けれどもといふこと)、熊本のコタル(如くある)、鹿児島のおいどん、大阪のオマ、スサカヒ等は方言の標本であらう。左に肥後と奥州との方言で咏み綴つた悪戯歌二首を掲ぐ。

肥後ッボがいさぎよか氣で居るけんどそぎやんことならどぎやんでもある。

5108

東夷かたでむつりべろくとだゝあがまわやよかんべいがし。

5109

他の地方の人には洋語同様にわからぬであらう。漫りに方言を用ゐるべからざる所以である。

科語 とは術語又専門語ともいふ。或特殊の學問上にのみ用ゐて廣く一般に用ゐぬ語をいふ。但し特殊の學術に關した文章に科語を用ゐて差支ないのは云ふまでもないこと、茲には唯だ普通文の中に濫りに科語を用ゐてはならぬといふのである。例へば天氣が荒れて來たといへばよいのを故らに「低氣壓」が波及して來たといひ、日本は昔から風景に富んで居るといへばよいのを「日本は先天的に風景に富めり」といふ類は科語を濫用したもので、低氣壓は氣象學、地文學上の科語、先天的は哲學上の専門語である。

些少の失敗に挫折すること勿れ、客觀と主觀と一致せざるは世事の常なり。「事志と違ふは世事の常なり」といひて足るべきを、これほどの普通文に客觀主觀なといふ哲學心理學上の科語を用ゐること、目障りといはねばならぬ。但し科語を用ゐることを忌むといふのは科語を用ゐずして當の事物思想を表はし得る場合

及び其の科語の一般に通ぜぬ場合についていふので、之れを用ゐずしては其の事物思想を現はし得ぬ時或は其の語の一般に通ずる時には科語を用ゐても差支ないこと勿論である。

訛語

とはなまり言葉即ち語の本来の意義を誤り用ゐたものを言ふ。例へば本来おはれなといふ意義の憫然を判然と混じて俗に憫然として明らかだといふ如き元來用の無いといふ意義の無用をすべからずといふ禁止の意に用ゐる本来かどふといふ意の迷惑を困却といふ意に用ゐる將來を慮るといふ意の遠慮を控へ目にするといふ意に用ゐる不孝を勸當といふ意味に用ゐる如きすべて訛語である。

如何なる發明の人もこゝ(酒食に迷はざるなし。(三浦安貞梅園叢書)

元來先人未發の物を工夫しことに當て倣めらるべき發明といふ語を伶俐明智といふ訛りの意味に用ゐた爲め、文章の品位が數等低くなつたとは明らかであらう。松木直秀の「修業の心得」の中に

學問の道は事業の中にて最も難きものなれば殊に茲に心得なくばあるべからず。然るに學生の常として初めのはとは随分よく勉強すれども漸くに

して退屈の念を生じ、その甚だしきは遂に廢學するに至る者あるは畢竟成功を望むの急なるによれり。

随分はもと分根相應といふこと、それを頗るといふ意味に用ゐた爲めに此の文の品格も一段卑くなつた。

誤字假名遣ひなども此の點から見注意せねばならぬ。秘密の秘を秘と書き崇を崇と書き膏旨を膏旨と書くたぐひ、或は車を推しといふべきを推せしといひ従うてと書くべきを従ふてとするたぐひは一つの訛りと見るべきもので、少なからず文の品位をおとすものである。

俚語

はまた俗語ともいふ俗間に行はるゝ野卑なる言葉のことで、馬鹿米羅棒、土左衛門(溺死者)管まく等は其の一例である。

昔者周公孔子の世に何ぞ當節の如く汗充の書あらむや。

軍國多事の際に於いて此の不祥の言を爲す、馬鹿の骨頂といふべし。

當節は今日などあるべく、馬鹿の骨頂は愚の至りなどあるべきである。斯様な俚語の挿まる爲めに折角の文章が下品なものとなつて了ふ。風俗をさながらに寫す

戯曲小説等に於いては、他の謹嚴なる普通の文章に於いては注意して俚語を避けねばならぬ。
以上は主として消極的方面から純粹を説明したのであるが、積極的方面よりいへば、文章を純ならしめむには常に必ず文法に従つてよく之れに一致させねばならぬ。係結の關係、動詞形容詞等のはたらき詞の屈折、テニヲハの用ゐる方などは殊に注意すべきものである。

穩當

穩當はまた妥當ともいふ。其の意味は文字の示す通りかたやかに當たるといふこと、即ち用語が内容の思想事柄に適當し、語句の選擇、按排が場合々に應じてよく辨まるようによく据わるようによく落ち著くようにすることである。前に説いた文章基礎の三要件を再び簡単に説明すれば、精確は誤解を容るゝ餘地の無いように書くこと、明晰は合點し易く書くこと、而して純粹は立派な言葉を用ゐることであるが、穩當は一步を進めて寫す言葉が寫さるゝ事柄にピッタリと辨まるよ

うに、語句の組み合はせが確かりして搖動かぬようにすることである。立派な言葉を用ゐて精確に解り易く書いても語の選擇及び其の組み合はせ方が穩當でなければ立派な文章とはいはれぬ。茲にはまる据わる落ちつくといふのは、此の事を寫すには此の語でなければならぬ、他の語ではそれを遺憾なく寫せぬといふ語簡單にいへば思想に密に契合した語を用ゐることによつて文章が穩かに目やすく大丈夫にきまふことである。恰當なる言葉を用ゐなければ一字をも換へられぬ、楨杆でも動かぬといふ名文は出来ぬ。例へば同じく身体の容積の増加することでも健全に増加する時には肥ゆるといひ病的に増加する時には脹れるといふ。同じく獸のはゆることでも、犬のはゆる場合には吠と書き獅子、虎などの場合には吼と書く。魚を數へるには何尾といひ、獸には何頭といひ、筆には何對といひ、硯には何面といひ、墨には何挺といふ。同じく盜賊のことも、人目を忍んで密かに財物を盗む者をば竊盜、小盗人、泥坊といひ、人家に踏み込み家人を威迫して財物を奪ふ者をば強盜、押込、おし躍込といひ、道に隠れて行人を剽す者を追剽といひ、街道を遍歴し行人を欺瞞して財貨を奪ふを護摩の灰、或はちばといひ、行人の油斷をうか

がうて其の身のまはりに著いた物を奪ふ者を、拘兒又は巾著切といひ、旅宿に泊り旅人の寢息を窺うて仕事するを枕さがしといひ、店丁の目をかすめて商品を胡魔化すを萬引といふ。或は水量多しといひ、水嵩高しといへばよく、箝まるが水嵩多し、水量高しといへばよし言葉が上品で意味が解ても落ち著かない。「説き盡くして餘蘊なし」綽々として餘裕ありといへば落ち著くが「説き得て餘蘊なし」綽々として雅量ありでは据わらぬ。「仕事も手につかずならばよく箝まるが、勞働も手に著かずでは箝まらぬ。これはホンの一例に過ぎぬが、如何なる事物を寫すにも其の場合々々に恰當適切なる語があり又其の組み合はせ方に一定の法があつて此の語を用ゐる此の法に由らなければ、文章が間抜けて弛んで搖動ついで極まらなくなるものである。是れ穩當てふことの文章に必要な所以、而して語句を穩當に用ゐることについて注意すべきことは、古來の用語例を熟知して之れに一致せしむること、語句が前後照應してよく纏まるようにすることである。例によつて左に穩當に關する例を擧げる。

狩野の四郎二郎元信丹青の器量古今に長じ、心ばへよき男ぶり親の繪筆の彩

5110

色に生まれつきたる美男なり。(近松門左衛門傾城反魂香)
 丹青の技に長じ、などいはば箝まらうが、古今に長じでは箝まらぬ。前に「古今に」とあらば「絶し」と無ければ不穩當であらうと思ふ。
 臥龍の躍れるが如きあり。(龜井戸臥龍梅を見る)
 臥した龍が躍つて居るといふわけはない。いふまでもなく不穩當。
 翁心地あしく苦しき時、此の子を見れば苦しきことも止みぬ腹立たしきことも慰みけり。(竹取物語)
 「腹立たしいことが慰んだでは落ちつかぬ前と同じく時でもなければならぬ。
 北海道の土人を古は蝦夷又は東夷と呼びて、多くは關東奥羽の地に散在し、冬は穴の中に住まひ、夏は巢の如きものの中に居り、獸皮獸毛を衣服とし、獸肉魚介を食とせり。(作文教範)
 初めなる東夷と呼び、土人を受け居るが、其餘の地に散在し、中に住まひ、中に居り、魚介を食とせり、等は土人はを受くべき言葉で、土人を受け居ることが出来ぬ。即ち此の文の前後對應の工合が喰ひ違つて居る爲めに、是等の語句は依

5111

りかゝるべき所なくして中有に行迷うて居るのである。故に斯様な文章を稱じて「彷徨文」(bewildering construction) 或は「齟齬文」といふ。此の文を穩當にするには「北海道の土人は古は蝦夷又は東夷と呼ばれしが多くは……」と改めて後の部分に調子を合はせるか或は「……東夷と呼びたりき」と一旦極めて更に「彼等は多く關東に……」と書き出すか、いづれかにすれば可い。

人間は天然力に抗拒して之れを我が支配の下に屬せしめむとす。天然力に抗するとはいへるが天然力に拒ぐとはいはれぬ。抵抗とあるべきであらう。一種の齟齬文である。

我が國の氣候や此くの如く寒温熱の三帯に亘ると雖も其の寒熱や吾人に無量の物料をこそ恵め、未だ心身を懶惰萎縮せしむるほど劇しからず。(日本美術史)

萎縮せしむるは可いが懶惰せしむるとは續かぬから懶惰にし、萎縮せしむると改めねばならぬ。「未だは不用の文字である。」

大石良雄は赤穂四十七士の巨魁なり。(菜園本)

巨魁というては四十七士が如何にも山賊海賊の様に聞こえる。同じく「かいら」といふことでも、斯様な場合には「首領」などある方がめでたいであらう。

人道の福音の由つて來たる所を考へて見れば、嘗に一箇人の考より湧き出でたものでなく、家庭の中に其の泉を發し、それから流れ、遂に世界に汎濫する様になつたのである。

汎濫は水の溢れることで、禍害が洪水の様にひろがることを形容する言葉である。福音ならば「弘布流布風化感化」などいふ語を使はねば落ちつかない。

疲れた足を大の字なりに伸ばして晝寐した。足だけでは大の字にならぬ。不穩當。

フピアスはカルタゴの滅亡を以て己れの任となしき。滅亡は自然にはるびること特に任とするに足らぬ。カルタゴ「滅」といはば倏であるであらう。

(後醍醐天皇は民の肩未だ安からざるに大内を建てられむとし、まつ官藤委伎能法師の類に所領賜はりて軍功ありし者に分け賜ふといふこともなく、た

ま／＼與へぬるをやがて召し返さる。(新井白石「讀史餘論」)

孔子は魯に行かれようとした。

諸君は已に十分に了解なされて居ると思ふ。
敬語は、前を略して後につけるはよいが、前につけて後を略するは不作法千萬である。「大内を建てむとせられ」或は「給ひ」魯に行かうとせられた「了解して居らる」と思ふでなければならぬ。俗語でも書物を持って來られたとはいふが書物をお持ちなすて來たとはいふはぬではないか。

春風心地よく肌を迫る。

心地よくなれば肌を觸れ、肌を撫で、或は春風肌に快くなどあるべきであらう。
東照宮會で煙草を禁じ給ふも深く益なきことを察し給ひてなるべし。

(三浦梅園)

(佐藤繼信忠信兄弟兩人とも他國の土となりて形見のみ歸りしを母なる人の悲しみ嘆きて……泣き沈みぬるを兄弟の妻、女其の心根の推量し、我が夫の甲冑を着し長刀を脇ばさみ勇ましげに出で立ち、只今兄弟凱陣しきと其の儼

を學び老母に見せ、其の心を慰めきとぞ。
前なるは昔禁じたこと、已に會てとあるからは禁じ給ひしもでなければならぬ。
後なるは、只今とあるからは凱陣したりでなければならぬ。これは時の違ひ又照應の違ひである。

(橋南翁「東遊記」)

鳥羽院の御代にや諸國の武士の源平の家に屬することを止むべしといふ制符たび／＼ありき。(北畠親房「神皇正統記」)

外史氏曰はく、吾れ舊史を讀み鳥羽帝の時しば／＼制符を下し諸州の武士の源平二氏に屬することを禁ぜられしを見て曰はく、大權の將門に歸したる、それ此の時にありしか。(頼山陽「日本外史」)

山陽のは親房のを扮本にして書いたのであるが、用語の妥當なる爲めに、殆んど瓦を化して玉となした趣がある。

文章の理想は高峯の月の容易には達し難いが、文を作って精明、純、穩の四標準に合することが出来れば、まづ首尾よく試験に及第して正しき文章の仲間入りが出来た者と云て可い。これ迄説いた所は譬へば垢を去り、風をふとす修行で、これから

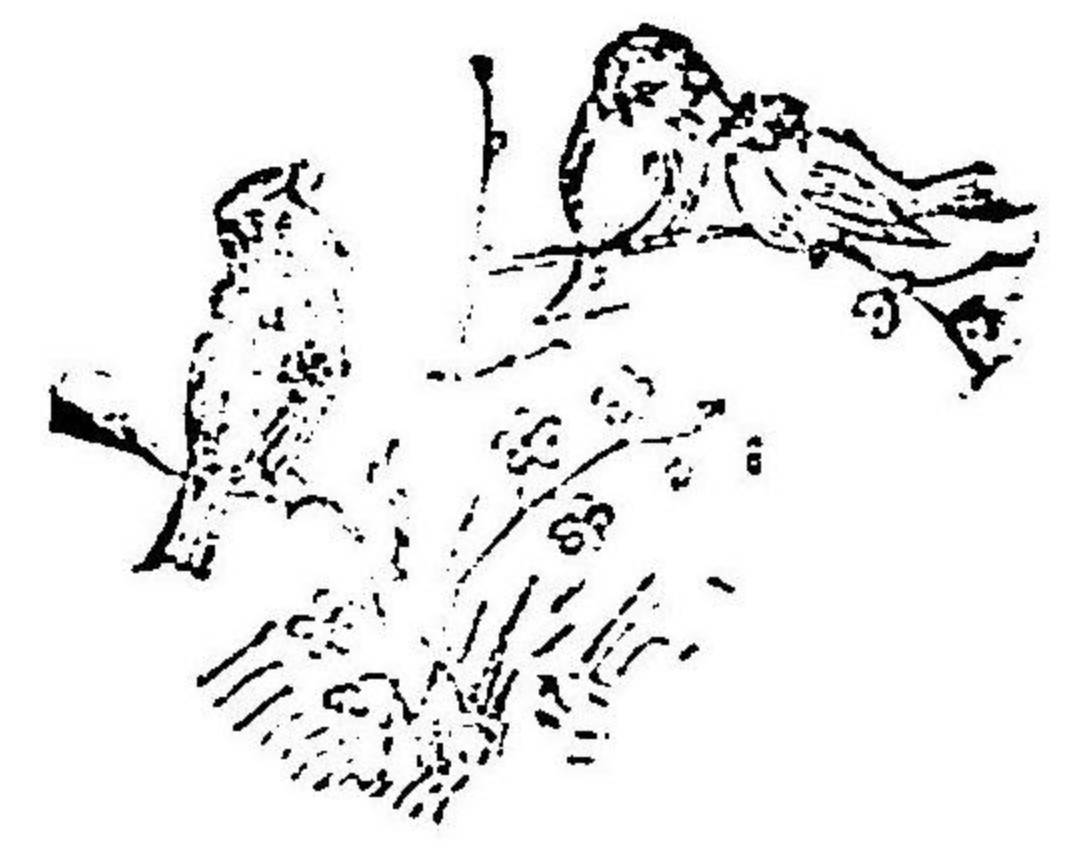
が衣冠束帯或は紅白粉に盛装を凝らして優美典雅莊嚴なる姿を現すべき所茲に
名残惜しき筆を止めて諸子が幾年後幾十年後に於ける大盛装大飛躍を翹望しま
す。
終はりに臨んで諸子の健康を祈り併せて此の後益々文章道にいとしみ給はむ
ことを望みます。



一〇二

が衣冠束帯或は紅白粉に盛装を凝らして優美典雅莊嚴なる姿を現すべき所茲に名殘惜しき筆を止めて諸子が幾年後幾十年後に於ける大盛装大飛躍を翹望します。

終はもと臨んで諸子の健康を祈り併せて此の後益々文章道にいそしみ給はむことを望みます。



出版

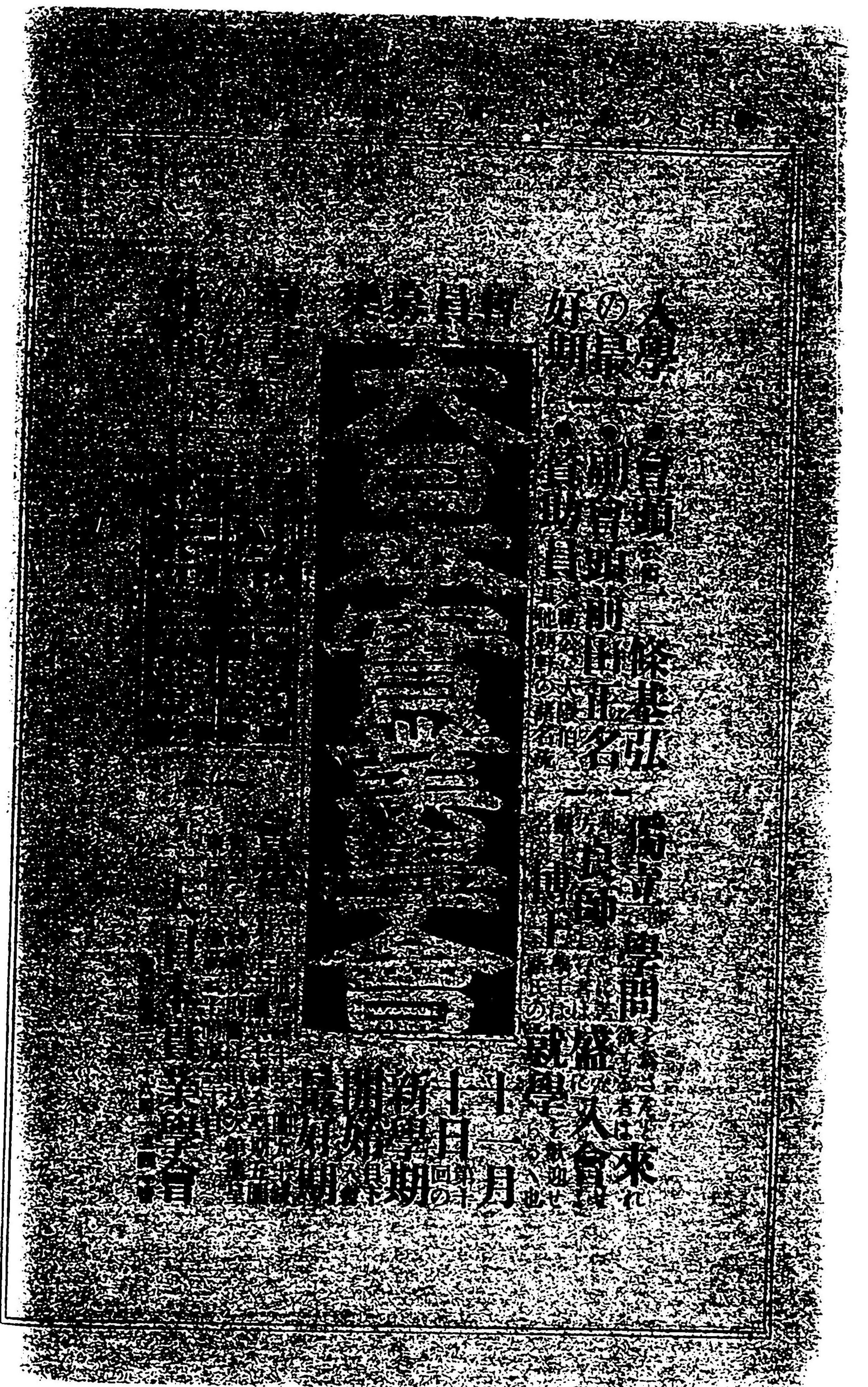
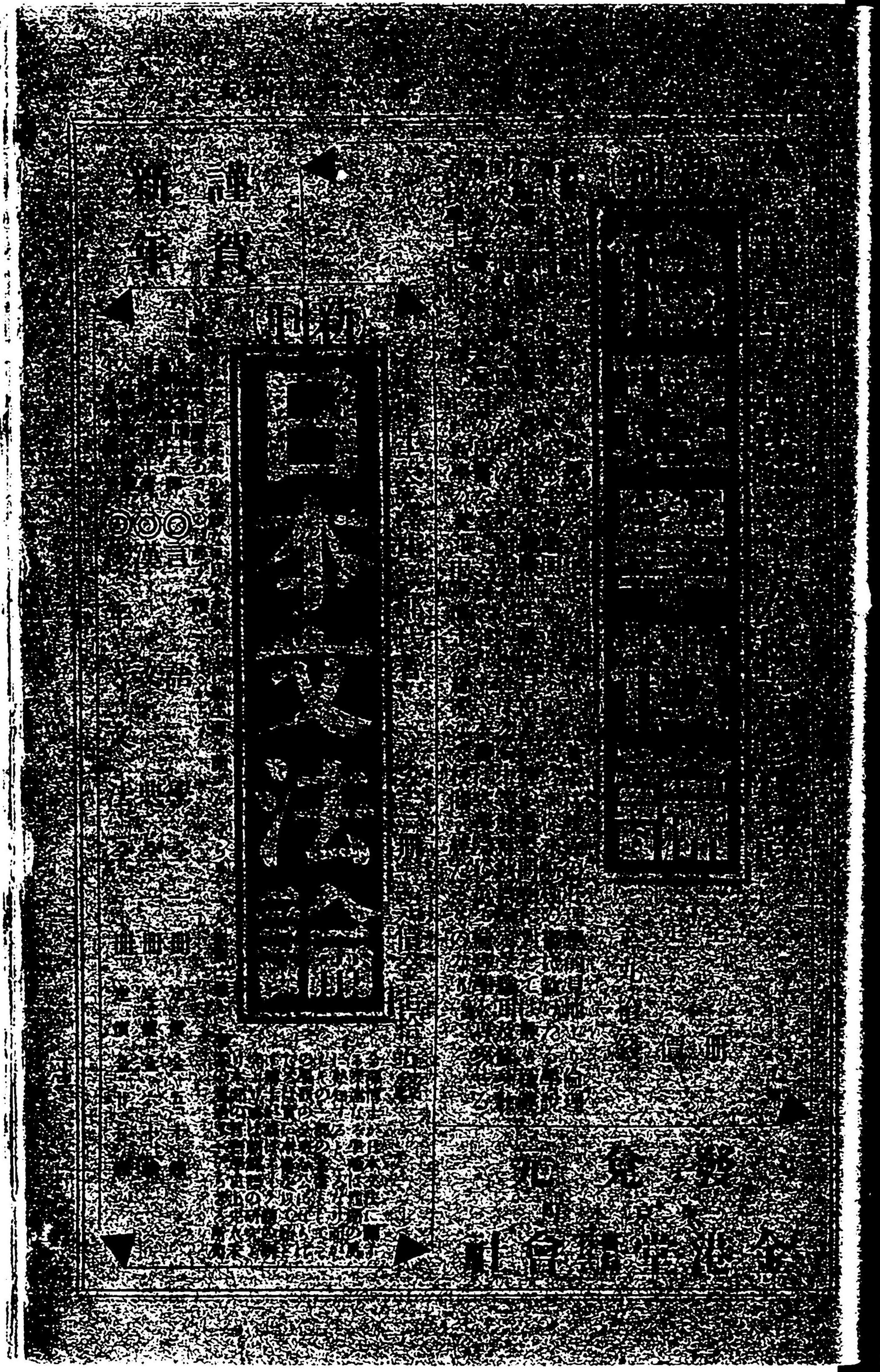


●洋装美本全三冊
紙製特別台子付
●正借金 貳圓
小包郵金 七角

●日本
●大正
●昭和
●文藝
●小説
●詩歌
●演劇
●新聞
●雑誌
●叢書
●全集
●選集
●評伝
●年譜
●日記
●書翰
●遺稿
●未刊
●手稿
●草稿
●原稿
●底本
●校對
●校訂
●校閲
●校核
●校勘
●校對
●校訂
●校閲
●校核
●校勘

●富山文會堂
●東京市神田區
●本町三丁目
●富山文會堂
●東京市神田區
●本町三丁目
●富山文會堂
●東京市神田區
●本町三丁目

發兌
元
富山文會堂
富山房



初春の毎日新聞の大活動
●『国文評釋』
●『國歌評釋』
●『俳句評釋』
●『韻文作法』
●『文學概論』
●『英文詩評釋』
●『英文讀本評釋』
●『漢語評釋』
●『漢文讀本評釋』
●『國文讀本評釋』
●『文學史』

大活動

廣告料

新聞社

又文學の相新刊廣告

● 國文讀本評釋 定價四角 郵稅四角五分 發行所 元見	● 漢語評釋 定價四角 郵稅四角五分 發行所 元見	● 英文讀本評釋 定價四角 郵稅四角五分 發行所 元見	● 英文詩評釋 定價四角 郵稅四角五分 發行所 元見	● 文學概論 定價四角 郵稅四角五分 發行所 元見	● 國歌評釋 定價四角 郵稅四角五分 發行所 元見	● 俳句評釋 定價四角 郵稅四角五分 發行所 元見	● 韻文作法 定價四角 郵稅四角五分 發行所 元見	● 文學史 定價四角 郵稅四角五分 發行所 元見
---	---------------------------------------	---	--	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------------

元見



古今圖書集成

卷之...

上海商務印書館



Main body of text on the right page, arranged in vertical columns.

御注の文節は本誌廣告に據る御旨附記を乞ふ

新

歐洲近世史

松村介石著

西洋哲學史

松村介石著

論理學

松村介石著

倫理學

松村介石著

大西博士全集

西洋哲學史

松村介石著

自年後之社會

松村介石著

歐米大文豪

松村介石著

歐米大文豪

松村介石著

松村介石著

英文イノブル物語

松村介石著

英語發音法

松村介石著

山田啓吉著

山田啓吉著

山田啓吉著

山田啓吉著

東京日本經濟新聞社

文學博士坪内雄藏序文
秋濤居士長田忠一作
佛國文豪ユゴー作
尾崎紅葉譯述

小説 鐘樓守

美術原色版四葉挿入
ユゴー紅葉氏肖像入
全二冊 洋裝 頗美
上卷正價金九拾錢 郵稅金八錢
下卷正價金壹拾錢 郵稅金拾貳錢
特製金貳圓郵稅金拾六錢

◎原名ノートルダム、ド、パリー◎

これ十九世紀五大傑作中の一位にある一大雄篇にして嘗て歐米の文壇を震動せしめたるヴイクトル・ユゴーが心血を凝いて筆にせる史的且つ情的小説にして原著者一代の大作家と認めらるゝもの蓋し紅葉山人畢世の譯筆を此大作に染め中途病魔の襲ふところとなりしと雖もなほ筆を絶たず稿成り將に出版に附せんとするに際して病やうやく革り終に本書の完成を見るに至らずして他界の人となり歟嗚呼當代の文豪として世舉つて其長逝を悼みたる由人最後に成る織美流麗の文は則ち本書に其面影をとゞめたるなり敢て請ふ世間情あり涙あるの士は一本を必讀に供せよ

發行所

東京牛込

早稻田大學出版部

東京日本經濟新聞社

博文館

文學博士坪内雄藏序文
秋濤居士長田忠一尾崎紅葉譯述
佛國文豪ユゴー作

小説鐘樓守

全二冊 洋装 頗美 本
上卷正價金九拾錢 郵税金八錢
下卷正價金壹圓 郵税金拾貳錢
特製金貳圓 郵税金拾六錢

◎原名ノートルダム、下、パリー◎

これ十九世紀五大傑作中の一位にある一大雄篇にして嘗て歐米の文壇を震動せしめたるヴイクトル・ユゴーが心血を濺いで筆にせる史的且つ情的小説にして原著者一代の大作と認めらるゝもの曩に紅葉山人畢世の譯筆を此大作に染め中途病魔の襲ふところとなりしと雖もなほ筆を絶たす稿成り將に歎厥に附せんとするに際して病やうやく革り終に本書の完成を見るに至らずして他界の人となりぬ嗚呼當代の文豪として世舉つて其長逝を悼みたる山人が最後になれる織美流麗の文は則ち本書に其面影をとゞめたるなり敢て請ふ世間情あり涙あるの士は一本を座右に供せよ

發行所

東京 牛込

早稻田大學出版部

東京日本橋區本町三丁目 博文館

新刊報告

ブルックセル大學教授アドルフ・プリンス原著
刑罰學博士勝本勘三郎
刑罰學博士淺見倫太郎
東京法政大學教授法學士淺見倫太郎共譯

法律最近刑罰論

全壹册總洋布製
紙數約六百頁
正價金壹圓八拾錢
郵稅金拾六錢

法律は衣服の人體に於けるが如く人類生活の狀態に適合せざるべからず
理論の高宗は事實と融和するに因て始めて光輝あり本書の原著者は歐米
の刑法學者中屈指の大家として聲名宇内に轟ける人、本書は則ち其最近
の著述に係り、近代諸國の刑法典と最近科學の產出物として刑罰權の基礎
を一新したる刑法の原理との融合を試みたるものにして所論適確理義明
晰、現下我國に於ける刑法改正問題に關し好指南たるべきや疑を容れず
而して之が翻譯は則ち本邦斯學の重鎮たる勝本氏及夙に法曹界に令名あ
る淺見氏の手に成れりと云へば其實質の如何は多く語るを要せざるべし、
學者幸に本書の先觀を以て人後に落つる勿れ

發行所

東京牛込
東京日本橋區
本町三丁目

早稻田大學出版部
博文館

早稻田大學校外生募集

本講義録は二年にて全科を修了せしめ三年制度以上の成果あらしむるは既に世人の定評あり又獨學者の不便
を醫する爲めには通受驗欄を設けて各種高等なる登用試験の問題を解説し學理と實際とを知らしむる
信實疑の道を開き受驗欄を設けて各種高等なる登用試験の問題を解説し學理と實際とを知らしむる
他學者の論說講演を掲げ正科講義の參考に資するが故に身教室に登らずとも研學上些の遺憾なし其學科担
任講師は左の如し●詳細規則書に在り通知次第送致す

政治經濟科 掲載課目 △帝國憲法△國家學原理△國法學△經濟學△經濟學史△日本殖産史△貨幣論△財政學△農政
論△西洋經濟史△財政學△銀行論△外國貿易論△商業政策△工業政策△社會學△商法要論△國際公法△國際私法
法律科 掲載課目 △法學通論△帝國憲法△民法總則△物權法△債權法△親族法△相続法△商法總則△會社法△商
馬法△日本法制史△國際私法△行政法

行政科 掲載課目 本講義は前二者を折衷して編輯せしものにして法律科掲載課目中の商法、羅馬法の代りに△商
法要論△經濟學史△財政學△經濟學史△外國貿易論△銀行論△公債論等を掲載す
右担任講師は高田、有賀、天野、松崎、和田垣、戸水、岡田、建部、仁井田、中村、山田、志田、美濃部の諸博士、今村、
宇都宮、小山、平沼、鈴木、牧野、齋藤、栗津、加藤、豊島、松岡、副島、志賀、宮田、和仁、青山、浮田、井上、小林、河津、
柳田、竹井、谷野、神戸、飯島、鹽澤、内藤の諸講師
●本講義録講修者は種々の便益を得べし即ち●圖書の閲覧 本校圖書館に於ける圖書の閲覧を許す
●學費を免除す 卒業は二ヶ年通信試験を爲し卒業證書を與ふ卒業後は准校友とし希望者は
●校內上級に編入す ●各月謝を免除す 卒業は二ヶ年通信試験を爲し卒業證書を與ふ卒業後は准校友とし希望者は
●二回發行毎號二百頁内外にて一ヶ月を以て完結せし ●第二號迄發行し入學を許す有
●月謝 一學年五拾錢 ●三ヶ月前納壹圓四拾錢 ●六ヶ月貳圓七拾五錢 ●一ヶ年五圓五拾錢 ●二科又は

東京牛込早稻田

電話番町
三七四

早稻田大學出版部

早稻田大學校外生募集

十月上旬
一號發行

●文學教育科、歴史地理科とも毎月二回の講義録を發行す●二回の講義録紙數二百頁内外にて二ヶ年卒業とす●月謝各六十錢、三ヶ月壹圓七十錢、半ヶ年三圓卅錢、一ヶ年六圓五十錢●學術普及の趣旨に基き入學金を全廢す

文學教育科講義

掲載課目略 倫理學、倫理學史、哲學、哲學史、心理學、教育學、教育史、言語學、國語學史、日本文典、支那文典、修辭學及作文法、國語及國歌の評釋、國文學史、漢文及漢詩の評釋、支那文學史、徳川時代漢學史、文明是非、有職故實、受験欄(國語漢文倫理教育の問題解釋)

擔任講師略 坪内、桑木、松本、木村、小杉、高田の諸博士、有馬、雀部、中野、保科、和田、高木、千秋、大橋、久保、武島、長の諸學士、綱島、中島、廣池、永井、青柳、宮崎、五十嵐、正宗、赤堀、桂の諸講師

歴史地理科講義

掲載課目略 日本史(古代、奈良朝、平安朝、王朝、鎌倉、南北朝、室町、安土桃山、徳川幕府幕末)、西洋史(上古、中古、近世、最近、殖民)、東洋史(蒙古、朝鮮、清國、印度)、地理學(日本、外國、地文、地圖、地史)、別科(歴史地理學、古文書學、日本殖産史、人類學、日本海史、考古學、日本美術史)、參考科(史傳、解題、評釋)

擔任講師略 重野、星野、坪井(理學博士) 横井、坪井(文學博士)、横山、那珂の諸博士、渡邊、三輪、河野、石川、山上、高桑、山崎の諸學士、久米、池田、浮田、内藤、矢津、野口、波山、福地、紀の諸講師

本講義録の講習者は掲載の講義に就て疑義を質問することを得べく其の他種々の特典あり細則を要する者は速に申込まるべし

東京牛込早稻田 早稻田大學出版部

新刊廣告

早稻田倫理學子細要

ドクソル、イブ 渡邊龍聖 田中達共譯

本書の特色は種々の倫理學說を捕へ最も公平に最も平易に叙述説明したる原著者セス氏は現にエヂンバラ大學教授として倫理學の講座を擔任し歐米の學界に斯學の重鎮を以て目せらる人、本校夙に本書を世に紹介する益ある思ひが抄譯を渡邊田中二君に囑し譯成て茲に博く江湖に頒つ、大方篤學の士就中初學者は必ず一本を座右に供て參考に資せらる

全 壹 冊
紙數二百餘頁
正價金四拾錢
郵税金 六 錢

發行所 東京東本町三丁目橋本區 早稻田大學出版部

御注の文は誌本に告る御旨を記す

再版廣告

文學博士桑木嚴翼 關山富共譯

早稻田論理學綱要

全 壹 冊
紙數二百餘頁
正價金四拾錢
郵税金六錢

本原書は歐米の哲學界に於て形式論理の發達の極度

に達するものな好評を博せるもの其説を構ふる正確堅固、組

織亦整然として一絲の亂る所し殊に其説明の周到明

瞭る他に其比を見ず是れ譯者の本書を**選ぶ**所以なり論

理と學とは**欲する者の爲に必讀の好著**なり

發行所 東京日本橋區早稻田大學出版部 發賣所 東京日本橋區早稻田大學出版部

御注の文は誌本に告る御旨を記す

刻下必讀之良書

男爵 林 董 鎌田榮吉 栗原亮一序
法學博士 有賀長雄 鎌田榮吉校閱
佛國ポリニエー原著 林 毅 陸譯述

露西亞帝國

全 壹 冊
脊皮上製美本
紙數八百五拾頁
正價金貳圓
小包料拾五錢

今や極東人士の耳目を聳動する者は露西亞なり然れども露西亞の本質實體は未だ世人の知る所とならずして我邦人の多くは露西亞の名を聞き只だ暗中摸索的に其版圖の龐大と馬の衆多とを想像し揣摩するのみ露西亞の關係は乃ち此に於ける際此の如く出でたるもの前帝は筆を露西亞の建國に起し上下二千年間に於ける治亂盛衰の跡を一般に政治宗教上千里外萬里露西亞の眞相は坐ながらにして之を掌に指すべきものわらん極東風雲の歸澹たる今日此兩書の如きは經世家と學徒とを問はず必ずや一讀せざるべからず

露西亞史

全 壹 冊
總洋布美本
紙數四百餘頁
正價圓貳拾五錢
郵税金拾貳錢

法學博士 高田早苗校閱 山本利喜雄著

發行所 東京日本橋區早稻田大學出版部 發賣所 東京日本橋區早稻田大學出版部

御注の文節は誌告に據る御附記を乞ふ

新刊報告

文學士 坂本健一著 (鮮明地圖挿入)

歴史 伊太利亞史

全一冊 紙數四百五十頁 正價金壹圓廿五錢 郵税金拾四錢

伊太利亞王國は其建國の新なる點に於て、其國土開闢の淵源遠くして幾多著名の史蹟を有するの點に於て、統一の大業急に成て而かも文物制度の發達頗る見るべきものあるの點に於て、其の國情頗る我日本に似たる所あり隨て其國民の特質其長短所の岐るゝ所必ずや彼我相似たるものなくんばあらず左れば吾人が伊太利亞史を讀むに由て生ずる幾多の感興は自ら他の列國史を讀むと異なるものあるや必せり而して坊間未だ此國の史を詳にしたるものあるを見ずこれ本書の出る所以なり本書筆を遠く四世紀の往古に起し最近三十年間の狀況を詳叙して擱む且つ其及ぶ所甚だ廣汎、歐洲文明興廢の事蹟亦本書之を示して詳なり

發行所 東京東區橋本早稻田大學出版部

御注の文節は誌告に據る御附記を乞ふ

新刊報告

文學士 白石眞著

歴史 獨逸史

全壹冊 鮮明地圖 三葉挿入

總クローヌ頗美本 紙數五百五十頁

正價金壹圓廿五錢 郵税金拾四錢

獨逸は素に歐洲古國の一、然も一旦瓦解に近きて復活の運に向ひ半世紀の活動は遂に歐陸の中原に覇業を成就せし世界林立の國家孰か國史を讀む痛快、思ひ度獨逸に則るも多し而彼國の史に就其由來を研究する者極稀なり蓋し恰當なる史的著作の欠乏に因り本書の出る偶然に非ざる

發行所 東京東區橋本早稻田大學出版部

御注の文節は本誌廣告に據る御旨を記す

早稲田叢書

序
沈思精研の餘に成れる抱月君が新美辭學一篇は我が國に於ては空前の好修辭論たり彼方の類書に比するも周到なる修辭法に兼ぬるに創新なる美辭哲學を以てしたる證例の東西雅俗にわたりて富麗なるその例とし斯學に志すの士は此の書にすがりて益する所いと多かるべし

道遙

●背皮上製
●五百餘頁

●再版
●發賣

新美辭學

島村瀧太郎著述

本書は全然著者の新見に成れる者文章論より美學に歸結し以て大方の批判を得んとす且初學者の爲には文學の入門たるべき準備と研究の過程とを有せり文字に志あると否とを問はず國民の座右缺くべからざるの良書なり

全 壹 冊
正價金壹圓卅錢
郵税金拾六錢

發行所 東京東本町三日橋區
早稲田大學出版部 博文館

御注の文節は本誌廣告に據る御旨を記す

法學博士 穗積 積 陳重 富岡 岡田 朝太郎 梅謙二 井政 章 閣校 郎 著
法學博士 逸 獨 勝子孫吾士 法學士 勝子孫吾士 法學士 勝子孫吾士
原トスリ、ン、フ (授教學大林伯) 逸 獨
譯 共彦政乾士學法 勝子孫吾士學法

獨逸刑法論

全 一 冊 正 價 金 壹 圓 八 角 八 分
郵 稅 金 拾 六 錢
美 製 布 洋 總 冊 一 全
紙 本 美 製 布 洋 總 冊 一 全
頁 餘 百 六 數 紙 本 美 製 布 洋 總 冊 一 全
錢 六 拾 金 稅 郵 錢 拾 八 圓 壹 金 價 正

刑法改正は現下法律界の一大問題なり此時に際し最新學說の精華を捉へ學界を裨益せむことを望みて本書を上梓せり原著者リスト氏は獨逸伯林大學の教授にして學問深奥識見卓拔彼國に於ける斯學の重鎮たるのみならず宏く世界に於ける法學界の泰斗たり殊に刑法は氏が多年專攻したる科目にして該博適確其の造詣する處殆んど端睨すべからず而も氏が一代の名著は今や乾、吾孫子兩學士が苦心の譯に成り加之岡田博士の嚴密なる校閲を経たり學界の新潮に後れざらむと欲する學者實務家速に一本を座右に備へんとを望む

發行所 東京東本町三日橋區
早稲田大學出版部 博文館

御注の文節は誌告に據る旨附記を乞ふ

新刊報告

田中穂積著

早稻田叢書 高等租稅原論

全壹冊
脊皮上製頗美本
紙數四百五十頁
正價金壹圓貳拾錢
郵稅 金拾四錢

本書の著者曩に『財政學』一篇を著して讀書社會の賞賛を博したりしが爾來六たび星霜を経て斯學に造詣する益々深く現下海外に留り歐米碩學に就きて推究研鑽怠らず其結果遂に本書を成せり本書題して高等租稅原論と云ふ必ずしも初學者の閱讀に適せざるか故に非ず其論究する處よく微細に入り普通原論に一步を進めたるものあればなり加之解義簡明にして行文平易先覺後進共に本書に須つ處尠からざるべし

發行所

東京牛込

早稻田大學出版部

東京日本橋區本町

博文館

御注の文節は誌告に據る旨附記を乞ふ

新刊報告

米國エ、ローレンス、ローエル 原著
法學士 柴原龜二 譯述

早稻田叢書 政府及政黨

全壹冊
脊皮上製美本
紙數七百餘頁
正價金壹圓五拾錢
郵稅 金拾六錢

我邦憲政を敷てより茲に十餘年上下漸く之か運用に慣るゝ者ありと雖も猶ほ泰西先進國にす比れば其の及ばざること遠し所謂憲政有終の美を濟さむとする者は須く其機關の組織連轉に就て更に深く研究する所なかるべからず本書は歐洲大陸に於ける政府及政黨の組織運用を詳説し政黨の政府に對する態度政府の政黨を御する方略等之を佛、獨、奧、匈、伊、瑞其他の各國に涉りて一々事實に基き沿革に徴し讀者をして歴々睹るの想あらしむる所趣味津津々として掬す可く兼ねて歐洲現時に於ける政府政黨に關する法理並に其の成立を知悉するを得む若し夫れ一部最近政治史として視るも細叙精說罕に見る所ならむ思ふに憲政運用に對する絶好の教科書として本書を推すも蓋し溢美にあらずるべし

發行所

東京牛込

早稻田大學出版部

東京日本橋區本町

博文館

御注の節に本誌の旨を記す

佛國文豪マリー・ヂ
長田秋濤譯
(訂正三版)

近世文學界の大傑作!

全一冊洋裝頗美本三色版寫真版數葉入

小説 椿姫

正價金八拾五錢郵稅十二錢

特製金壹圓郵稅金十四錢

現時法曹界の一問題!

發行所 東京市本町三丁目 早稻田大學出版部

戊辰

御注の節に本誌の旨を記す

新刊廣告

文學博士 坪井九馬三著 (挿圖數葉入)

早稻田叢書 史學研究法

金壹冊總洋布製
紙數五百五拾餘頁
正價金壹圓六拾錢
郵稅金拾四錢

著者坪井博士は史學を專攻せらるゝこと多年一日の如く現下斯道の大家として令名噴々たるは普く人の知る處なり博士自ら本書に序して曰く予不敏と雖も史學研究法を講ずる爰に年々科學的研究法を史學に應用し聊か得たるを自信すとして博士が本書に對し所說嶄新にして正確文章は極めて平易なる言文一致體を用ひられたれば一讀よく精髓を窺ふを得べし固より世間多き名著なり

發行所 東京牛込 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區 本町三丁目 博文館

御注文の節は本誌廣告に據る御旨を記す

青柳篤恒 中山東一郎共編

清國漫遊案内

全壹册洋裝頗美本
清國風景寫真版數葉入
正價金七拾五錢
郵税金八錢

本書は日清兩國間及清國內地に於ける汽車汽船の發着時刻里程、賃銀等詳細にして鮮明なる諸表を掲げ清國各地の名所舊蹟より主なる旅館及其旅籠料等に至るまで周到精緻なる道中案内を載せ且附録として日清兩國稅關手續り清國內地旅行用具等旅行者一般の心得も叮嚀に説明すれば渡清者必携の好侶伴として蓋し空前の指南針也

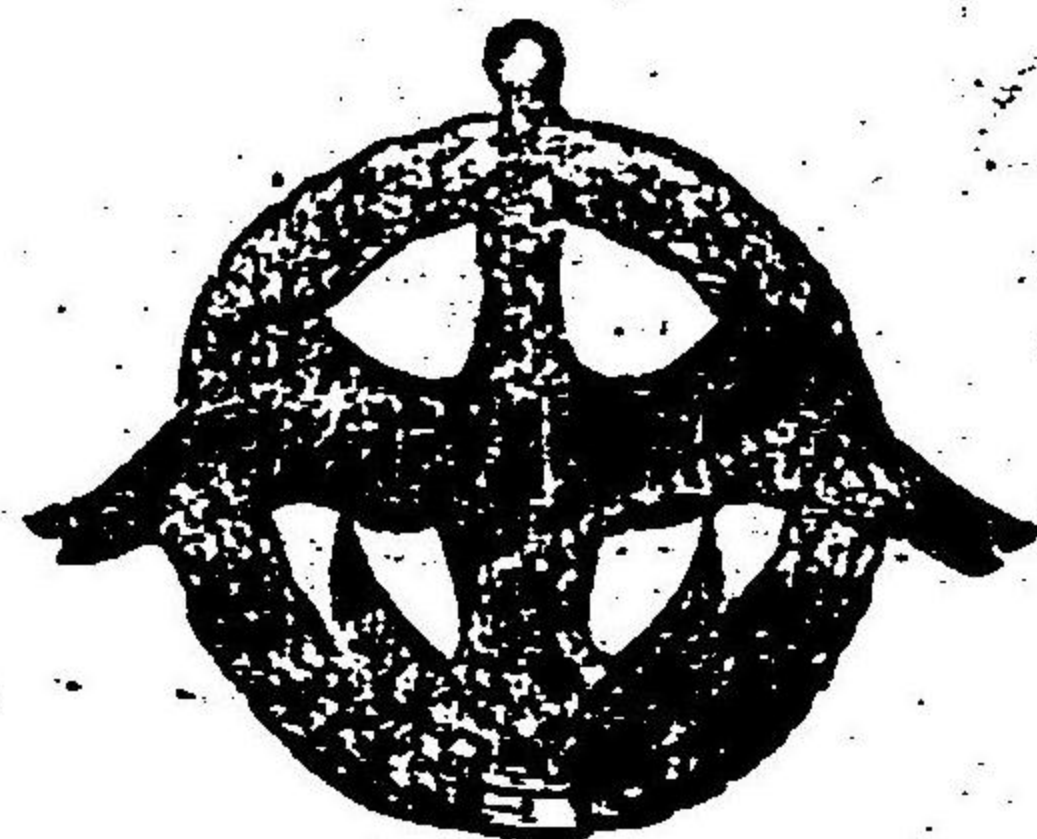
發賣所

東京市日本橋區本町三丁目 博文館
 賣捌所 神田東京堂 神田有斐閣 本郷丁酉社 本郷文求堂 其他

創立明治十年

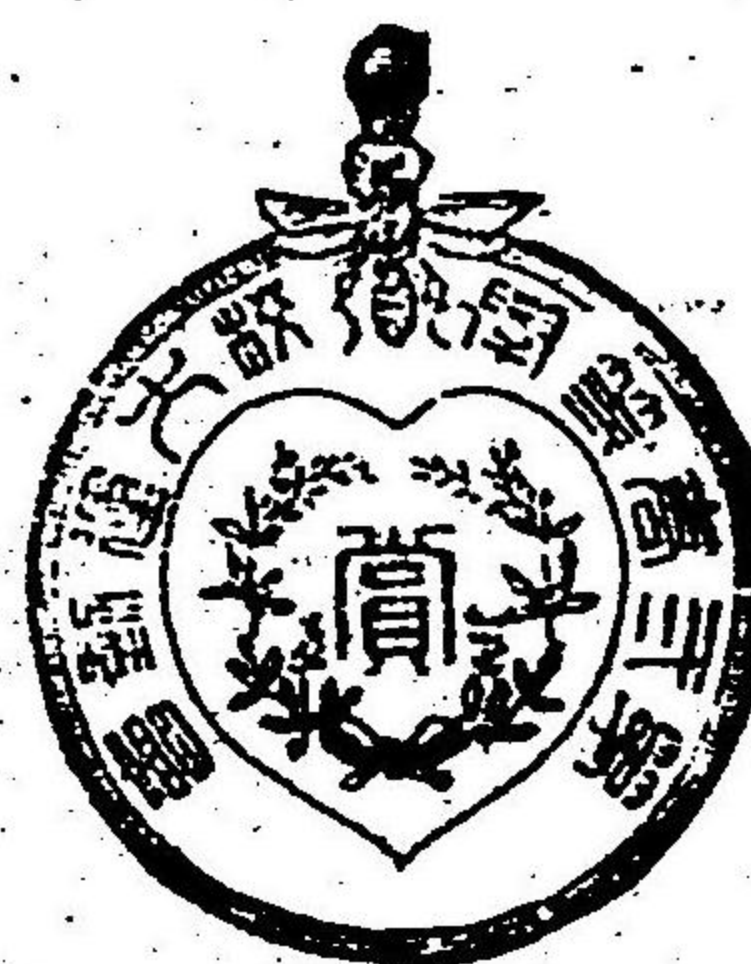
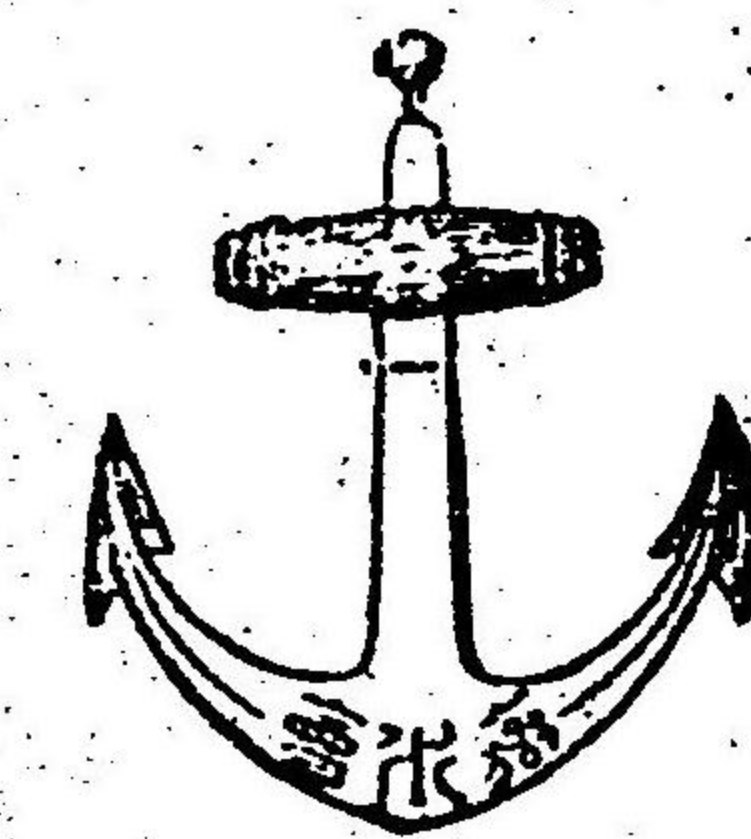
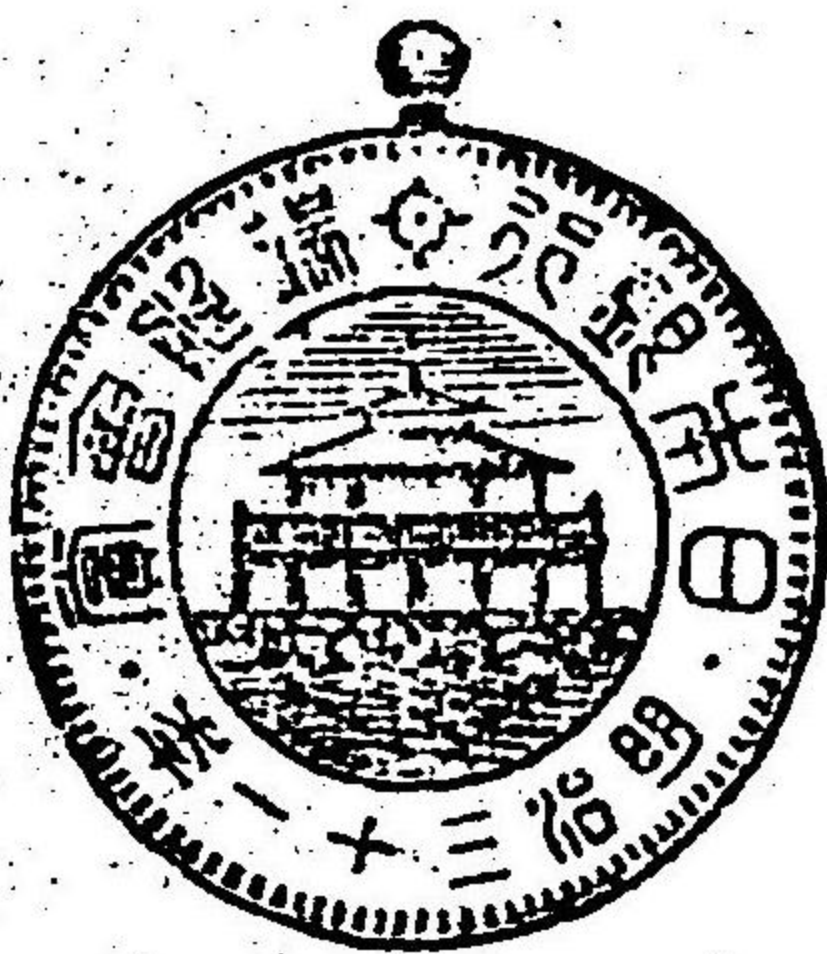
各學校、團體、俱樂部、共進會等ヨリ賞状、徽章、帽章、金銀本
 盃等ノ製作ヲ命セラル、モノ年々幾多ニシテ數フルノ盛運
 ヲ見ルハ江湖諸彦ガ斯業ハ弊舖ノ獨專ニシテ而カモ熟練
 精巧、迅速、廉價、誠實ナルヲ賞セラレ深ク御愛存ヲ賜ハル
 結果ニ外ナラス弊舖ハ此信用ヲ維持スルガ爲メニ如何ニ技
 術者ヲ督勵シ品質ヲ精撰スルカハ偏ニ御實見ニ依テ御判斷
 フ乞フ
 御申越ニ依テ詳細ナル手續書下鮮明ナル圖書ヲ進呈ス
 東京市麹町區飯田
 町三丁目拾番地
日本帝國徽章商會
 會主 鈴木梅吉啓具
 電話番町八五七番





創立明治十年

各學校、團體、俱樂部、其進等ヨリ賞牌、徽章、帽章、金銀木
 各等ノ製作ヲ命セラル、モノ々幾萬ヲ以テ數フルノ盛運
 ヲ見ルハ、江湖諸彦ガ斯業ハ弊舖ノ獨專業ニシテ而カモ熟練
 精巧、迅速、廉價、誠實ナルヲ賞セラレ深ク御愛眷ヲ賜ハル
 結果ニ外ナラス弊舖ハ此信用ヲ維持スルガ爲メニ如何ニ
 術者ヲ督勵シ品質ヲ精撰スルカハ偏ニ御實見ニ依テ御判斷
 ヲ乞フ
 御申越ニ依テ詳細ナル手續書ト鮮明ナル圖書ヲ進呈ス
 東京市越前區飯田町三丁目拾番地
日本帝國徽章商會
 會主 鈴木梅吉 啓具
 電話番町八五七番





鹿印煉齒磨は

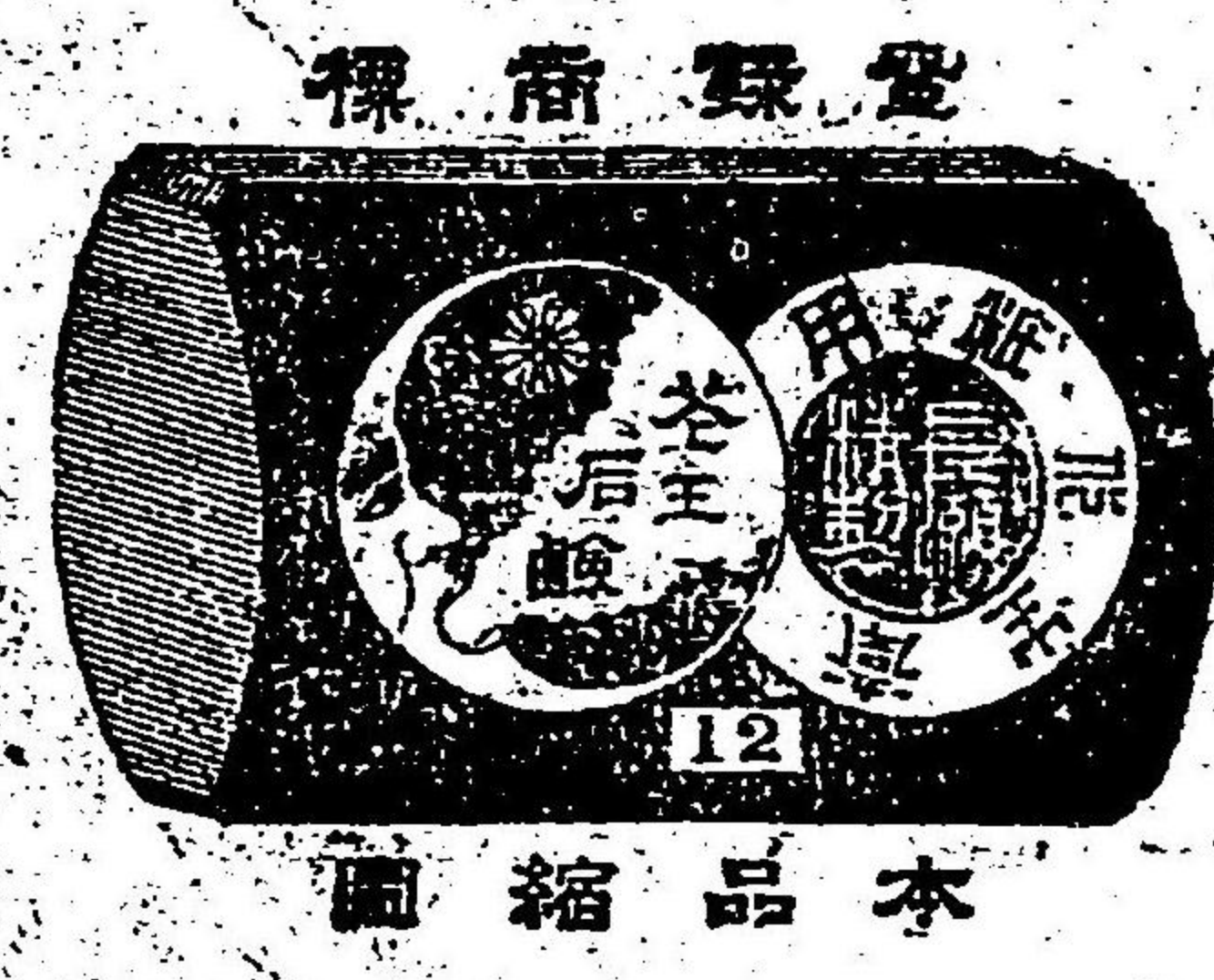
良質佳味にして衛生上
最効能あり使用後精神の
爽快なるは本品の特色なり

花王石鹼

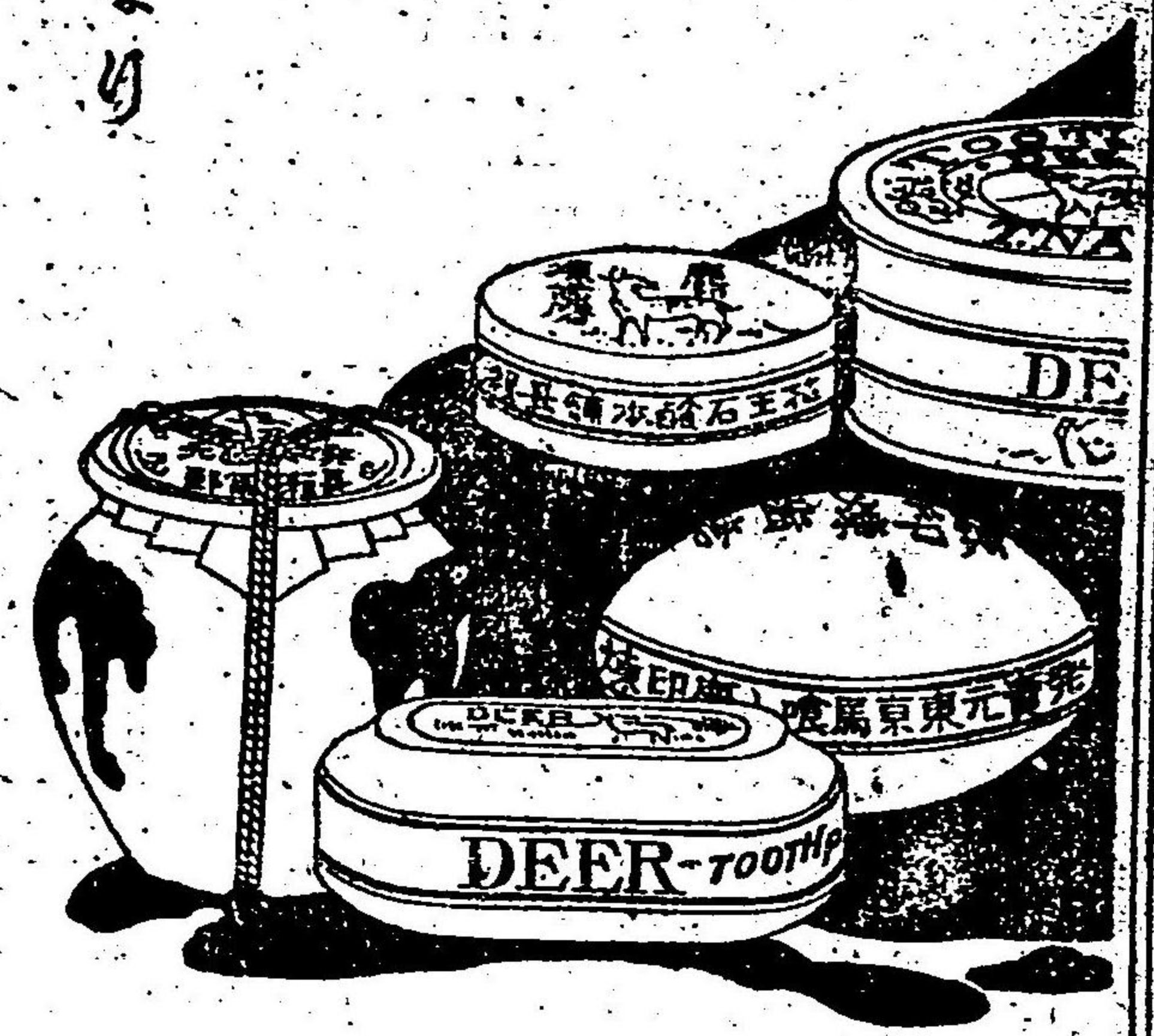
品質の善良及衛生と經濟を
旨として精製し浴く需要

諸君の好評を博しうある佳品なり

賣捌所は全國到る所に有り



圖縮品本



(番三花浪話電特)目丁二町喰馬京東

郎富瀨長 舖本鹼石王花 元賣發

13
489

